明治三十年十一月二十四日發行

女鑑

第百四拾五號

東京國光社

女鑑第百四拾五號

目録

女鑑

今日になりて菊つくらうと思ひけり……一

論説

心身を清潔にもつべし……五十園德文……五

北海道の教育……石榑千亦……七

史談

野中女婉の傳……栗田寬……一二

荒木田園女……鹽井ふく子……二〇

家政

折形……有住齊……二五

茶の湯……関蕃雄……二六

女禮……有住常子……二八

たちぬひ……西山たい子……三〇

遺花(卌二)……伏見藤三郎……三一

だいどころ……三三

學園

秀歌集(十)……鹽井正男……三四

ふゞくろ(五)……下田義天類……三八

漫録

浮世いかた舟(續)……作者不詳……四六

主從教草……(續)……諏訪忠元寄贈……五〇

安藤惟翁が千年山八境の記……岩内誠一……五二

文字知らぬ女房……五十園德文……五四

我が身のあだもの……さくみつ……五五

才くらべ……蓬生屋女史……五六

笑話……蕉風仙史……五八

須磨の月……白魚女史……六〇

文林

歌……東久世通禧……六四

仝……佐々木高行……六五

仝……鍋島直大……六五

仝……前田利嗣……六五

仝……長谷信篤……六五

仝……諏訪忠元……六五

仝……津輕承昭……六五

仝……長谷信成……六五

仝……宮地嚴夫……六五

仝……阪正臣……六五

仝……鎌田正夫……六五

仝……師岡正胤……六六

仝……大畑弘國……六六

仝……三輪義方……六六

仝……下田義天類……六六

仝……三浦千春……六六

仝……佐々豐水……六六

仝……草野隆道……六六

仝……木庭芳香……六七

仝……伊藤純三……六七

仝……伊東賢祐……六七

仝……五十園德文……六七

仝……菊池眞澄……六七

仝……足立正枝……六七

仝……近衛貞子……六七

仝……西四辻蔭子……六七

仝……柳原愛子……六八

仝……小池道子……六八

仝……北島以登子……六八

仝……諏訪晴子……六八

仝……南郷柳子……六八

仝……松平健子……六八

仝……原田蒼生子……六八

仝……服部磯子……六八

仝……小川直子……六八

仝……安東菊子……六九

仝……海上幾子……六九

文……五十園德文……六九

長歌……海上幾子……六九

雜報

みやぐさみ……七〇

島津男爵の授爵披露……七一

永代橋成る……七一

永代橋のかなちがひ……七一

婦人義勇會……七二

婦人共立育兒會……七二

町立女子大多喜實業補修學校……七三

町立大多喜圖書館……七三

貞婦秋山けい女……七三

あたらよき子を……七四

たやすき消毒法……七五

音聲と食物と……七五

精神病の鑑別……七六

ビールと壽命との關係……七六

落語の三つ四つ……七六

大蛇船中に卵を産む……七六

女子教育要言……七七

敎の庭

懸題 歌數百首 文數十章

口繪……高橋松亭

荒木田闔女



女鑑 第百四十五號

今日よなり菊つくらうと思ひけり

菊の花の咲く時に至りて、はじめて、其の菊を培養せんと思ふ心も出でぬ。されど、其の時、既に過ぎぬ。今更にせん方なく、何のかひもあらず。誠に面白くも、みやびやかにやさしくも、われ〱人生の心がけを、諷諭したる詞ならずや。此のやまと島根の女子と生れたらむには、兩親にまめやかに、良人に子どもにやさしく正しく、兄弟に朋友にむつまじく、誠に優に美はしきやまと島根の女子たる生涯を送りたる人なりとの稱賛をきゝながらに、此の世を終らむことは、誰れも誰れも、共に願ふ臨終の心なるべし。

されど、かねてより、平生に、さる心がけなくして、兩親にまめやかに仕ふることをせず、良人にやさしく正しく侍くことをせず、わが子をやさしく賢く養ひ導くことをせず、兄弟にやさしく睦からず、朋友に信を盡すことをせずして、うの

臨終に成りて、俄に、優に美はしきやまと島根の女子たらむ名をとゞめむことを願ふとも、そは、かねてより、菊を培養することをせずして、花の咲く時に至りて、俄に菊を培養せむと思ひ出でしと仝じことにて、今更に、何のせん方もなく、何のかひもなからむ。よき臨終の名をとゞめまほしくば、かねてより心がけざるべからず。

それは、人生の心がけの、最大きなるものにして、なほ、細なるものをいはむに、親の子として、常に親にやさしく仕ふる心がけなくして、その親の臨終の時に至りて、俄に孝を盡くさむと思ひ立ちたりとて、何のかひかあらむ。ましてや、その親の亡からむ後をや。されば、かねてより、常にもやさしく仕へざるべからず。知らぬ人の家に嫁ぎて、心々なるむづかしき舅姑小舅姑の間に立つ時に至りて、俄に我儘氣隨なるわが心をとゞめむとするも、そは、いとむづかしきことにて、むづかしき家族の間に入りて、よく、まどかに家を治めゆく嫁たらむことを思はゞ、まことの父母の膝下にある時より、かねて、我儘氣隨なる心の起らざらんや

うに心がけざるべからず。また、家をあづかり、家を治むべき身となれる時に至りて、俄に其の道を知らむとするも、いとおくれたる事にして、かねてより、女子は、その道を心がければならざるべからず。また、一度不貞の女子となりたる後に、はじめて、良人に正しく仕へんことを思ふも、更にかひなき。また、わが兒女を有ちての後は、はじめて、わが子を養ひ導く道を學ばむとするも、いとおそきことにして、女子は、何時かは母となるべき身なれば、かねてより、その道を心がけざるべからず。さては、わが子の我儘に愚に生ひ立てる時に至りて、はじめて、これを正しく賢く導かむことを思ふとも、せんなし。かねてより、母たる時の道を心がけ、また、常に、正しく賢く家庭を守らざるべからず。すべて、女子は、必、人の妻となり、家を治め家庭を守るべきものなれば、かねてより、常に、其の道を心がければならざるべからず。

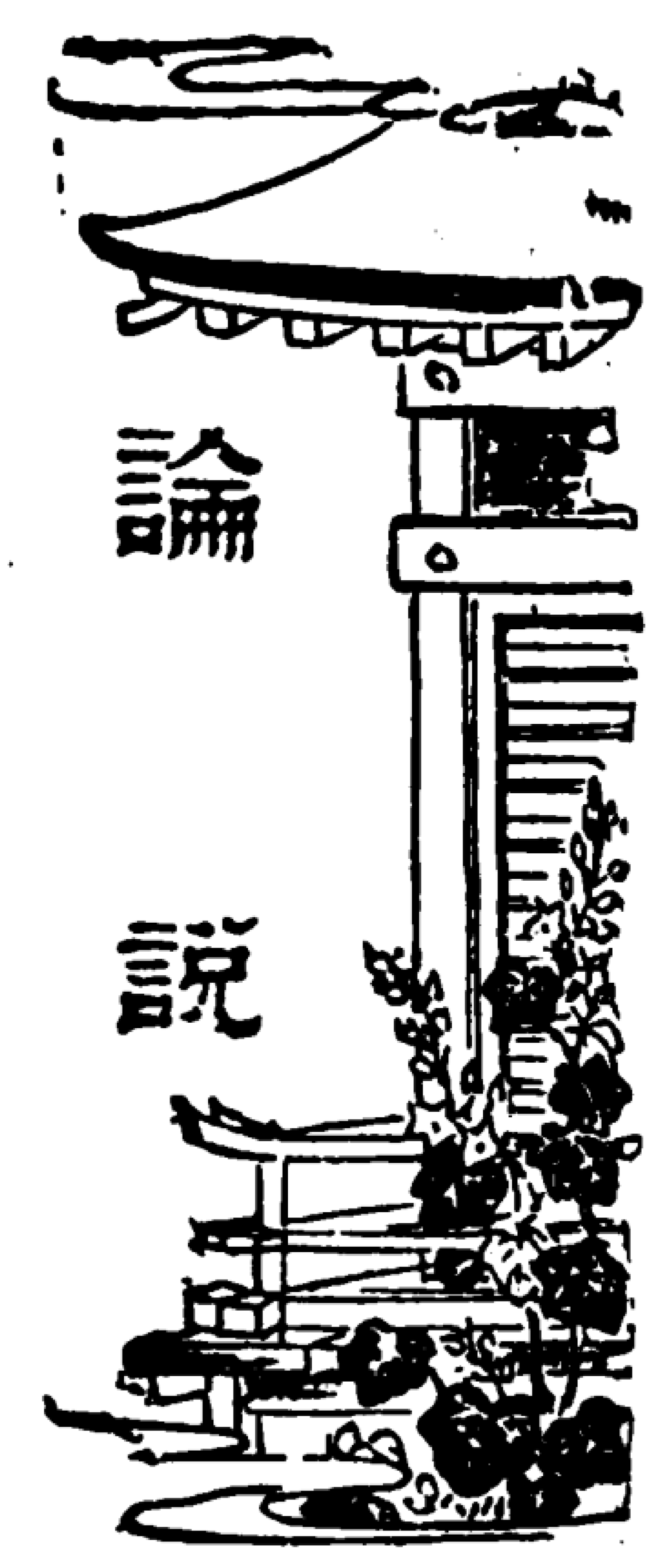
なほ、細なる方に立ち入りて云はむに、めでたき錦繍を手にして、はじめて、めでたく縫はむことを思ふとも、つねに、針の道を心がけずは、めでたく縫はむこと

は思ひもよらず。また、他人の前に出でて、優にやさしく振舞ひ、やさしく美はしくものいはむとても、常に、やさしく振舞ひ、やさしきものいひを心がけずしては、俄に引きつくろひたりとて、いかで、優にやさしかるべき。なか〳〵に、見苦しきさまも出で來なむものぞ。

すべて、やまと島根の女子は、世に立ちては、美はしき徳、美はしき容姿、かしこき智識、すこやかなる身体を具へまほしけれど、それ、すべて、俄にはつくるべくもあらず。皆、かねてより、常に、心がけてこそなれ。かねてより、心がけて作るにあらずは、皆、菊の咲く時に至りて、菊をつくらむと思ひ立つと同じくして、何のかひもなからむものを。

大江の千里

うゑしとき
はなまちどほに
ありしきく
うつろふ秋に
あはんとやみし



心身は清潔にもつへし

五十園徳文

人の心と身とは離れがたき關係ありて、もし身にいたむ所あれば、心隨ひて苦み、思ふにまかせぬことのありて心を苦むれば、身おのづから衰ふ。さて人の身の病は、そのよりておこる基さま〴〵あるべけれども、われと思ひしづみて、身のはたらきをにぶらするよりするもの多かるめり。常に心を潔くし、ほがら〳〵として物にとゞこほらず、清風明月のごとくなるべし。身はたとへば家なり。心はたとへば主宰なり。その主宰たる心のすゑざまによりて、家たる身は、滅さんも榮えしめんも、思ふがまゝなるべし。家は主宰たる者によりてたもたれ、主宰たる者亦家に依りてたつことを得。さて又あるじ打ちなやみおこたりてのみ居て、家の内外をも掃ひ清めず、そこ〳〵の修繕をもせざらんには、家おのづからさびれて、はては、雨もり壁もおち、柱梁も皆朽ちて、主宰いかばかり住まほしく、はなれ憂く思ふとも、今は久しくなれたる住所に

も住みがたきに至りつべし。人の身も亦かくの如なるべし。心常にとゞこほり、物憂がりうちなやみて、勢もなくしをれてのみあらんには、そがつもり〳〵ては、遂に體の内外のはたらきも全からず、食物とゞこほり、神氣いよ〳〵欝々として、身に病をかもし、手足やせつかれ、身神ともにやつれ衰へて、果は醫藥も及びがたき迄になり、世の役にも立たぬ者ともなり果てつべし。主宰と住家とは、人の身と心とによくも似たる哉。人もとより生れながらにして、かよわきものあり、健けきものありて、おしなべては云ふべからねども、理はひとつなるべし。そも〳〵人は心のすゑざま肝要なり。此の樂しけき代に生れ合ひながら、えうなき事にも、われとわが身をこがして、憂き世なりと思ひしづむめるも尠からざるめり。迷へるも甚しといふべし。心きたなく邪にして、かくれたる事を行なひ、さてかへりて雲を捕らへんが如き望をおこして、それ成らずとて、みづから心をいらち苦しめ、身を憂き淵に沈めて、われと命をちゞむるもの世間往々にしてあめり。戒むべし。心に邪なく、行に後目たき業なくば、世に何をかはぢ、何をか懼れん。さて身のほど〳〵を顧みて、世に處しなば、はた何をか憂ひんや。かへす〴〵心身は清潔にもつべきものなりかし。心身潔ければ精神自爽快にして、身體亦自健康なるべし。さて百歳の壽をも保つを得べし。

なる國民に基すともいへり。これ亦忠君愛國の理に合ふべし。

北海道に於ける教育

石榑千亦寄贈

試に日本の地圖を開かむ、最北に於ける一大島嶼を見るならむ。是れ今の北海道にして、昨猶蝦夷と呼び殆度外視したるもの、否、今猶其傾あるもの。

予頃日北海道に遊び、大に感ずる所あり。請ふ暫く予をして之を語らしめよ。

抑々本道の地勢たるや、地圖の示せるが如く、遠く北方に走れるが故に、本洲と然まで懸隔せざるにも拘はらず、自ら本洲人の頭腦に入り難く、可惜美土をして荒蕪に歸し去れるが如き狀況なりしも、黒田伯爵の開拓使長官として、大に力を本道に用ゐられしより、稍面目を改め、就中、函館の如き、小樽の如き、將、札幌の如き、本洲に在りても猶且恥づるなき繁盛を極むるに至りぬ。

函館、小樽、札幌、要するに北海道を知らざる人も、其名を知るが如くなりぬ。蓋、今日の盛況を見る、偶然にあらざるなり。然れども彼の大島嶼中、僅々二三の市街、いかで滿足することを得む。東の方室蘭の狀況を見よ。根室の情勢を見よ。未だ區々、西部及西海岸に於ける開拓を以て、全道漸く開拓し得られたりとするは、速了たるを免

れず。

先づ是等西部及西海岸の比較的開拓せられて、人口戸數稍饒多なる處に付いて觀察せしめよ。

本道に於ける事情を討究せんには、先づ本道に於ける移住者の區別を明かにせむことを要す。而して其區別は如何。海產を目的とするもの最多く、次は農產物、山林に於ける產物等なるべし。是等の輩は、萬金一たび手に唾すれば得られむのみと、冒險的に想像せるもの、然らざれど、或者のために、或事のために、家屋資產を蕩盡し、失望の極之が挽回を企圖せんとするもの、然らざれど、喰詰者、破落漢等にして、生涯地方に於いて既に信用なく、將、爲すなき者等ならざるなし。夫れ斯の如し、其人物の程度に至りては、思ひ半に過ぐるものあらむ。魚介を伴とするもの、鋤斧を侶とするもの、其茲に思ひ至りたるは、多とすべしと雖も、北海道は、人類の塵溜塲にあらぬを思へぞ、却て本道に取りては、長大息に堪へざるものならむ。彼の區々屯田兵の如き、將、何かあらむ。

嗚呼何れの點より敎育に說及すべきか、漁夫、農夫、樵夫、而かも是れ普通の漁夫、農夫、樵夫にあらず。無智無學なる彼等は、敎育其物に對しては、殆ど對岸の火災視せる

なり。若し夫れ諸種の製造會社、物産會社等ありて、學識あるもの無きにあらずと雖、是等は本道永住の目的をもつて、此土に來れるものにあらず。利益は之を導きたるなり。一朝望外の希望者あるか、損失を招かん時は、既に彼等の本土にあらざる時なり。畢竟彼等は利益に同情を表せるものにして、本土に熱誠あるものにあらざるなり。然らむ、是等は暫く之を例外として、論せざるを得ず。

本道の維持者として、移住者の先輩として、猶一部を有てるもの、之を土人即ち「アイヌ」とす。「アイヌ」其物はいかに、教育につきて語るに足るものあるか、予は一言にして之を蔽はんとす。曰く、彼等は禽獸と何ぞ擇ばんと。

僅に鼻端をのみ存して、艶黒羨むべき彼等が美髯は、一見秀才を奪ふが如く、銃をすて丶、猛進する老熊を格鬪する彼等が勇氣は、一見豪傑を欺くが如く、鈍刀をもて荒木を精げ、圓又角、効みなる彫刻は、一見良工をも走らしむるが如しと雖、畢竟彼等が無教育を表白する材料たらむのみ。先輩者又斯の如し。孰れか教育を注入するものぞ。

學校に於て五時間の課程を受け、三年將五年、得る處果して何物。其間家に在つて職業を營まむ、海にゆき、山にゆき、將野に出で丶採拾する所、猶汝が口を養ふに足ら

むと、彼等の父母は、實に斯の如き妄想を以て、子弟を遇するなり。教育の行はれざるは、夫れ自然の然らしむる所か。

飜つて地勢について見れば、海岸延長線の長き、實に驚くべきに足る。而して、海岸一の砲臺なく、一の要港なし。一朝事あらむ如何、斯の如き長海岸に、我軍艦を駢置して、以て敵に備ふるを得べきか、敵の巡航艦に追躡せられたる商船は、遁げて何れの港灣に入り、保護を受くべきか。思ふ、彼の日清戰爭の當時、我軍の花園口に上陸したる狀勢を推せば、何れの地か、敵の上陸に便ならざる。軍艦足らず、砲臺なく、陸軍はた言ふに足るものなし。假令行船に便なる炭礦ありと雖、行軍を速かならしむる鐵道ありと雖、津輕海峽は敵艦の横はる所とならむか、本洲との交通、之をいかにして連接せしめむ。彼炭礦や、彼の汽車や、會以て敵のために準備をなしたると異るあるか。

今や我邦の範圖遠く西南に延びて、漸く北方の警備を忘却せんとするが如し。而して、其危殆實に斯の如し。又其住民實に斯の如し。何を以て之に當らむとするか、自分勝手の名に交換せられて、露領となりたる樺太島の南端本道に面せる處は、今や屯營を置きて非常に充て、猶飽くことを知らぬ獅子は、食餌を貪りて南の方本道に[illegible]せん

とす。博愛の名を借りて、甚しく外教の徒は本道に跋扈し、至る處宏壯なる會堂を見る。是等は、此無教育なる可憐の子女を驅りて、漸く愛國の念に遠からしめんとす。如此にして茲に至れば、彼といひ、是といひ、實に痛憤に堪へず。然れども、旣往は之を如何ともすべき樣なし。老壯の徒、將、之に施すべき術極めたる至難なれど、予は一劑以て之を未發に防ぎ、有事の日にても見事之にあたり、恥を後世にのこすことなく、殷鑑遠からず、樺太的汚名を止むることなからしめむとす。一劑とは如何。其は人の妻となり、人の親となるべき女子をして、教育の道に向はしめ。入らしむるの外なしと信ず。

然れどもこの事たる、多くの人の腦裡に冷かなる本道にとりては、至難中の至難とす。教育に熱心なる婦女子は、何ぞ一躍行きて、此の無智無學なる子女の指導に任せざる。口邊墨を印して猶且誇り、美の何物たるを解せざる「アイヌ」をして、何ぞ聖代人民の列に導かざる。此は是れ教育者たるものゝ義務にして、將又一大快事ならずや。如此にして彼の子女を導き、延て愛國の念を惹起せしむるに至らむ、全道のために、否、本邦のために如何ばかりの鴻益ぞや。予の特に此任を女子に企望する所以は、其資質温

順にして、最無智無學なる兒女の敎育に適せりと思へるなり。

嗚呼予は寧北海道の開けざるを憂へずして、敎育の開けざるを歎せずんばあらず。如何となれば、敎育の普及せられたらむには、北海道の開拓、敢て難事にあらずと信ずればなり。敢て世の敎育者に問ふ。特に女流敎育者の諸氏に問ふ。

史談



野中婉女の傳

栗田寛

婉女は安履亭と號す、土佐國野中傳右衛門良繼の女なり。母は池氏の女、良繼は所謂土佐の名大夫兼山の事なり。兼山稟性剛毅英特にして、威儀甚淑し、博く書籍を閲し、古昔を考へ、其の志を得るに及びて、其の學び得し所を以て、之を一國に施し、佛宇を毀て學校を興し、磽确を變じて膏腴となし、農兵を置き、藥草を栽ゑ、蜜蜂を養ふ等の庶新政、みな國家の利益ならざるなし。寛永中、專ら食を足らすの術を先とし、

曠野を開きて水利を通じ、千尋の盤石を疊みて、畑の關を造り、上税數萬石を貢するを得せしめ、津呂御崎の巉巖を破碎し、永世渡海の舟船をして風濤の難を免がれしめ、又、文公家禮を以て國人に敎へ、火葬を禁じて國風を一變し、親の喪に三年の制を執れる篤厚の人なり。然るに、良繼沒して、其の子彝繼の時、過あるを以て、官祿を褫はれ、親族共に西境宿毛の地に謫せられたりと云。其の時、婉女僅に五歳なりしが、多年の後、兄弟姉妹みな配所に死して、孤露の身となり、父を思慕するの餘り、其の身體は骨立といふむかりのありさまにて、謫居にあること四十年、邦君遙に聽しめして、元祿十六年これを免恕し給ふ。嗚呼區々の女性の身を以て、時流に染まず、凛として霜雪も其の志操を傷ふ能はざるの槪あり。然かも、謫居にありながら、能く其の道を失はず、遂に父の寃罪をも雪ぎ、晴天白日の代に野中家を再興たりしは、眞に幾千年の後に亘りて、婦女の龜鑑となすに足る、是に於て、婉女は、其の舊趾に歸り、居を土佐郡朝倉村に營み、幽棲して、藥を賣て生理とす。邦君また其の貧しきを憐み給ひて、八人扶持を給はりしを、婉女は、邦君の恩惠厚きに感じ、又これを受くるに忍びずして、將に辭せんとす、時に舊臣走り來り、泣て諫めて曰く、御身貧困なる事多年、今や祖母は堂にあり、且老たる乳母のあるあり、向來何を以て生を成さむとす

るやと、婉女辭するに詞なく、終に其の諫に從ひたりといふ、以て其の如何に清廉なりしかを證するに足らむ。婉女は性質聰了にして、平素四書を講じ、五經を究め、詩歌を以て其の懷をのべ、樂府を歌ひて心意を慰む、又四書を手寫して、家に藏し、父祖の爲めに香美郡の勝地を求め、祠堂を建てゝ祖先の神靈を祭り、忠臣古槇氏を合祀し、祭文を作りて鬼神に告ぐ、實に挺生の才女なり。享保十年十一月晦日六十八歲にして終る。余未だ其の行狀の委しきものを見る事を得ず、然かれども、其の志操を推し考ふるに、卓然として自立する處、丈夫といふとも及ぶ能はざるものあり。因て、又兼山の行狀を思ひ、其の家庭の嚴肅なりし事をも思ひやられて、敎育の忽にすまじき事を知れり。今その作る處の朧夜の月の文を左に掲ぐるは、文辭巧麗ならずといへども、婉女が學問の力と、品行氣品のすぐれたるを見るに足るべく、且近來の婦女子なまめきたる空文浮辭を事とし、其の詞を金玉にして、其の行を泥土にする類の戒めともなるべけれども、讀者よく之を味へよ。

朧夜の月　　安履亭婉女

世の中いろ〳〵と移りゆくことを聞傳へ侍る、我つれ〳〵の折柄、柴の庵のうちに

て、そこはかとなく、よしあしのものがたり聞て、理をつめ工夫して見侍るに、をのこりよしあしきこと、親子君臣のあひさつ、夫婦兄弟朋友のまじはり、不レ殘聖人の仰おかれし御言葉、又々常々の御身持、時々のかはりゆくにつけ、くはしく書物に有、女子の教も、聖女賢女烈女、そのほかいろ〳〵、おろかの筆につくしがたき、ふみどもあまたありとはいへども、それを吾人心にかけ、道理を合點し、論をつめ、わが身の心から、工夫せし人はなく、今時の風は、髪の結様、びんのけつりやう、又は衣類のもやう、これより外によきことはなし、どれもひたまふは、あさましきかな、いたましきかな、そのいにしへもろこしの教くはしといへども、是は賢女風にて、おそろしなどゝきらふ人あるや、和國のならはしいとやさしく、殊に吉田兼好とやらんが徒然草、又は紫式部が作りし源氏物語、是に雨夜のしなさだめのうちにも、いとはぢかはしく、またはやさしく、女のつたなきをそしり、よきをも上の品とはめてあり、しかれども今時は、何とやらん歌書を、戀のなかだちとこゝろゑ、もし見る人のあれど風義あしく、それは用ひやうのあしきゆゑ、人參ほどいのちつなぐものはなけれども、用ひまじき折から用ゆれどあしく、人參のとがにあらず、もちゆる人に有、よろづ世中のこと、よしあしともに、傳へきゝては工夫すべし、

天地のうち何か義理をまぬがるゝものあらむや、よく考へ工夫すれど、さすが天性備はりしゆゑ、誰にても外より來ることにあらず、なるほど中庸の理にあたるべし、れろかの身ながら、學のゆかり故、人に笑はれ給はぬやうにと、あまりいたはしくれもひ書送りぬ、必人に見せたまふべからず。

一此度何某とやらむのかたへゆきたまふよし、なるほどつゝしみたまふべし、我身はいとけなき頃より、さすらへの罪にて、しづみし身なれど、よろづのこといざしらず、此時分こゝもとへ來り、世間のはなし聞傳るにも、とりわけ夫婦のあひさつに、つたなきこといと多し、わきにて聞きにくきことのみ侍る、それにつき萬に一つも、若平生の身の持樣の、たよりにやならんとて、書送り侍るぞかし。

一夫といふものは、義理にれひて、あなづりかるしむるものにあらず、天のごとく也、かくあるゆゑ、隨分傅みりちぎに、かげひなたなきやうに、ありていに心をもつべし、我になさけふかき時は、機嫌よくうらゝかにつかへ、またなさけうすきとれもふと、みな人々かはくせあしきよしつたへ聞ぬ、それはさもしきことぞかし、こしもとや遊女ていの身持ならむ、侍の子たるものは、夫婦は一體の身なれど、夫のはぢは妻のはぢ、妻のはぢは夫の耻ぞかし、互におかしきことあらば、

切ばだも、ふべき事なるに、夫のあしきことを、聞たてんとするは、惡心なり、女は地にたとへしものなれば、天にしたがはぬ地はなし、その道理を考へ、夫われになさけなくわたり給ふとも、又はやさしくとも、義理を亂し給ふべからず、其の恩愛の心を、深かく色にそむべからず、ひたすら夫のためよきやうに、家のことをはからひ、しもすゑつものまで、やさしくわたり給ふべし、それともうはむきけいはくにだまし給ふべからず、いかなるおろかのものも、人の上はよく知るもの也、下末は、つたなくあしきことをいひ。はかなきことのみおほし。ゆるしたまふべし。此心おすれば。おのづから家來もわれも。心うちとけあしきことはなし。

一第一夫によからぬことをいひかけ、うらみ給ふべからず、親子さへふだんすめば、互に心にかなふ事ばかりはなし、況や他人のよりあひなれば也、しかれども夫婦のあひさつは、こゝろやすきよしさある故、いふまじきことをいひ恨出るならむ、さりながら、二葉の松の雲にそふまでとおもふ、あひさつもかんにんせねばならぬものぞかし、人の家にゆき、わが家となすことなれば、苦勞有べし、必々いづくにおりとても、我おもふやうなることばかりはなし、何事につきても、父母類中のおもはく有れば、こゝを恥ておもひ給ふべし、父母は過し身、おもふべからず、鬼神と

なりて、おまつみそらに、明らかに御存知也、子のよきは嬉しくおぼしめし、あじきはつらく、鬼神もやすんじたまはず、愛を合點あらど、いよ〳〵よろづ心をむかくにもち給ふべし、むさぼる心よりあしきことおこる、とりわけ慾のうちにも、色欲淫欲ほど、身をほろぼすものはなし、愛よりしつといでくる也。

一　しうとめとあひさつ、色々世間に聞にくきこと多きぞかし、いかぶんにしかり給ふとも、しうとめ腹を立給ひなど、とかふいはずに、おやまつるふせいして有べし、さあれどいひやむこともあるべし、

一　第一むかふに子供有るよし、いとけなきものは、他人の子までもかはゆし、殊にいはんや、偕老とたのむ妻の子、誰にあるとても、皆いとほしき夫の子なれど、なぜにくむべき理なし、愛をよく〳〵分別して心をつけいとほしみふかくそだて給ふべし、うはむきの輕薄は、どけの見ゆるものぞかし、本をよく〳〵合點して、かはゆがり給ふべし、人々わが腹に生ずる子をとりたてんと、愛につたなき心有、まへよりある子を、大切にすれど、わが子は天の守り有て、我力つけずして仕合よし、けつく我子をかはゆがり、まゝ子をにくみ給はゞ、天のせめをうくべし、まゝ子をはん母の心になりて見る時は、さぞ〳〵かはゆくおもひたまふらん、と工夫すべし。

一家來のつかはれもの、よりあひいせい咄しに、たれは旦那様の御氣に入、かれはかやうにおかり、奥さまよりは御ちようあいふかし、かやうに仰せらるゝなども、さて〱かたはらいたく聞にくし、たとへをの子のことなれど、たはれにいかぶんの事をいふにもせよ、いかなるおろかの人なりとも、我妻といやしきつかはれものとかゆべきや、それをまことゝおもふは、おろかのことぞかし、清少納言枕草紙に書しにも、女の身にゝも、いとしんしやうなる、その人がらの人なじみいふは聞よし、つたなきものゝ、色々なれ〱敷いふは口惜し、ましてをのこのきもんひきつくろひ、けたかき人を、わがものがましく、しも末のなれ〱しくいふは聞にくし、といはれしぞかし、そのあるじ聞給はゞ、さぞいやとおもひ給はん、しかれどもせんしやうはなしするかたはらにて、聞てはいと口をし、そのやうなる咄、いひかけど、につこと笑ひて、必々聞べからず、それよりして家をみだすもとひ、詩經にも家のみだれ、外よりみだるに非らず、女の舌よりみだる、とあり、必々愼み給ふべし、田夫までも存じ事など、すこしにても、行ひの便にやならむ、と俗文に書送る也、もし腹たち給ふことあらば、此書を見給ふべし、人に見せたもふべからず、萬に心をくばり、堪忍し給ふべし。

一此度行給ふ所、先妻有之よし、さあらむ前の内證の事、よしあし語るとも、とかくいふべからず、さふらひは、かたみたがひ、必口ひらくべからず、今をそしらむとて、前をほむるものもあり、又そしらむとて、いちはらくろく、あしくいふものもあり、此二色過し事にあらず、能々分別しおもふべし、我身を外のものになして、評判して見るべし、朝夕に道理をかんがへ給ふ時は、天神地神も、あはれとおぼしめし、まもり給ふ故に、夫婦のあひさつよし、比翼連理のおもひにて、子孫榮ゑ給ふべし、獨心のうちなれども、恥おもふべし、ゆだん有べからず、愼み給ふべし。

五月やみあやめもわかぬ道すぢを
たづねてあゆめおぼろよの月

荒木田園女

盬井ふく子

かけまくもかしこき伊勢の大御神に、かしこみ仕へまつりし荒木田一有の妻、園女と聞ゑたるは、津の國難波津に咲き出でし花の少女にて、淺みどり、まだ春淺きつぼみの頃より、父母の庭の敎をよく守り、とく春雨のよの古言を學びさとりて、才いみじく、そめ出る言の葉のあやうるはしう、げにすだたぬ鶯の聲めづらしききふし多くぞ聞

ねける。

さらでも、黄金しろがねにかへがたき子が、才いみじく、何のおしかる事もあらねど、何はの事も堅ねずいつくしむ父母は更にも言はず、その姨の遠里小野に住みけるが、分けてなづかしみ、ふり分けの髪撫でつ、けづりつするに、園女もまたしたはれて、遠くはあらぬ同じ津の國、遠里小野に行き通ひ、はては、絶えずそが家に居りて、大方は、その家にて生長しけるとなり。その姨なる人の家の門近く、糸櫻のいと大きなるが、いとよくしだれ、春毎に咲きこぼるゝ色香のめでたきに、かげろふの長き春日、遊ぶものいと多く、かざしくらしぬるあかつき、いたつらに枝折りて去るものさへ少なからぬに、園女、之をいとをしみて、

めづるともたをりそ花のをしけれどたゞ見るのみを家づとにせよ

と、難波津のうら若き手して、短冊にかきつけ、枝に結ひつけけるに、遊客之を見、みな感吟して、それより折らずなりけりとぞ。時に、園女、年やうやう十と云ひて、一つと呼びける春のやよひの事なりけり。

後には、荒木田何某と云ふ名立たる俳諧師につきて、俳諧の道をふみ分け、師死して、また、杉田望一の門人、杉本元貞が妻、美津女と云ふにつきて、其の道をきはめけり。

時に、一有、醫業を修めんとて、此の難波津に遊びけるが、園女之に嫁ぎて妻となりぬ。夫も、世に俳諧を好み、且、書をよくし、其の名高う聞えけり。一有の作れる句の中に、

上元や松にはじめて春の月

とく散りて見る人かへせ山櫻

帶古し未だ旅なる衣がへ

　　旅行夏に逢ひ

園女も、おなじ道を以て、もろともに樂みけるが、おしきなや、元祿の五年、夫は早くよみじへとまかり立ちけり。

山櫻ちりても人はかへらぬ春のくれ、如何なる旅路に人は衣やかゆらん、夏の初、せみの羽衣かふるにつけ、入相の鐘しろく散る花を見るにつけ、園女が心は如何にさびしかりけん。それよりは、偏に俳諧を以て我が世とし、我が友とし、樂みとし、東に下りて、芭蕉に從ひ、いよ〳〵その道をきはめ、翁みまかりてより、又、其角に從ひ、同じくその道を究め、後には江戸の深川に住みつきて、眼科を以て世のたつきとなし、頭そりて尼となれど、眞中を十筋ばかり殘しけるもをかしかりしか。是は唯一のむか

しを恐れてなりしとぞ。さるが故に、佛の道に入りても、異なるさとりを開きけり、曾て、雲虎和尚に答ふる書に、

來書の赴拜見申候不求眞不求忘は大道の根源誰も存ずる處はゞかりながらめづらしからず候一心源頭に上下の所作柳はみどり　花くれなゐたゞそのまゝにして常に句を云ひ歌を綴りて遊び申候事に候無益の口業ならむ一切經も無益の口業にて候法臭き事は嫌にて我が平日の行は念佛と句と歌となり極樂へ行はよし地獄へ落るはめでたし和玉韻　自己念其不覔心　淸燈巳燿一燈心　市中默々有明鏡　全識人間淸淨心誰か見ん誰か知るべき有にあらずなきにもあらぬ法のともし火

と、書し送りけるとぞ。享保八年、六十歳にて、名を知鏡と改め、冠里公の母君に仕へ、その十一年に、年六十二にして、

秋の月春のあけぼの見し空はゆめは現かなむあみだぶつ

とよみて、靜に世を辭しけりとなり。

夜あらしや太閤樣の櫻がり

手をのべて折りゆく春の草木かな

負ふた子に髮なぶらるゝ暑さかな

あるはその伊達しつくして紙子かな

なども、園女がよみたるものなり。

園女、また、容儀いとゝのひたり。かつて、蕉翁行脚して、園女が里に行きけるを、請じけるとき、翁、その容儀のとゝのひたるに感じて、

白菊や目にたちて見るちりもなし

としるしけるに、園女傍に

紅葉に水をぞながす朝月

と書きつけけるとなり。とにもかくにも、めでたき才女にこそ。



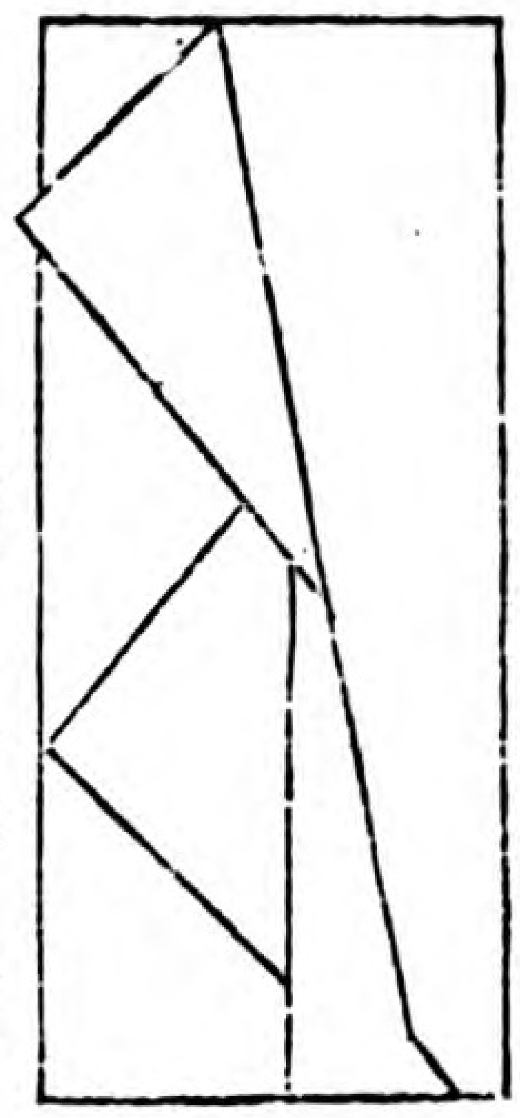


家政

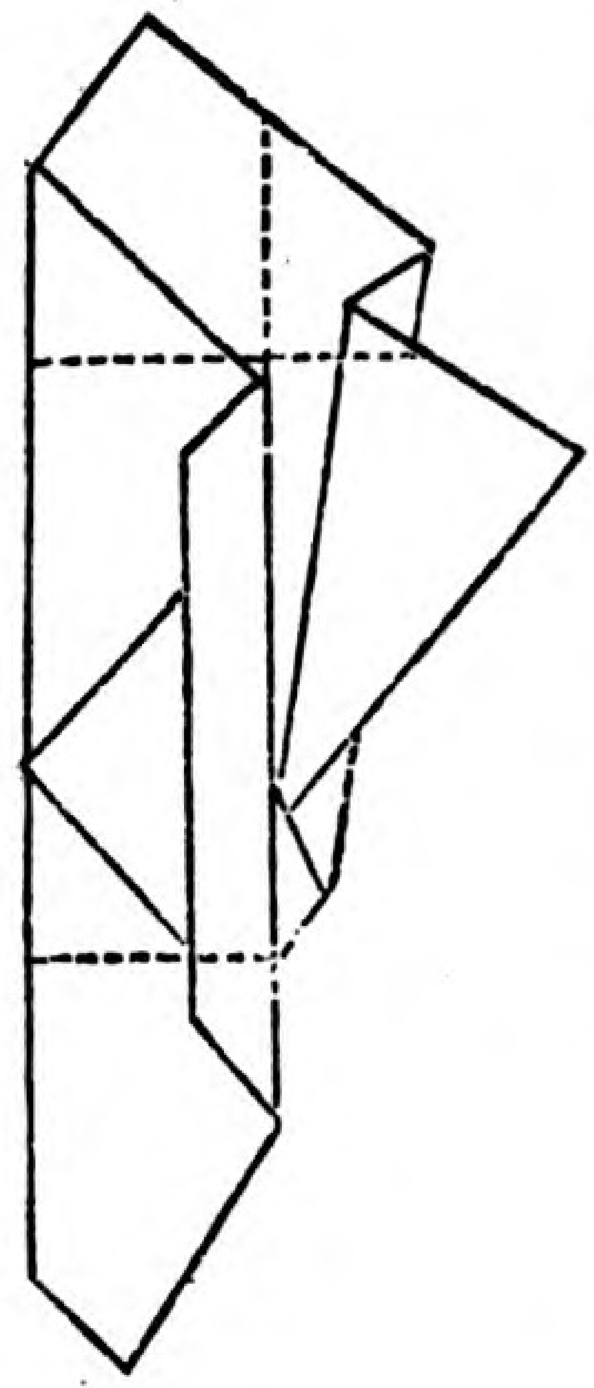
折形

有住齊

染小袖包



是は袖地を包むなり。裏、綿なども添へて包み遣すこともあり。



れなじく右と上下を啓き示したる圖。

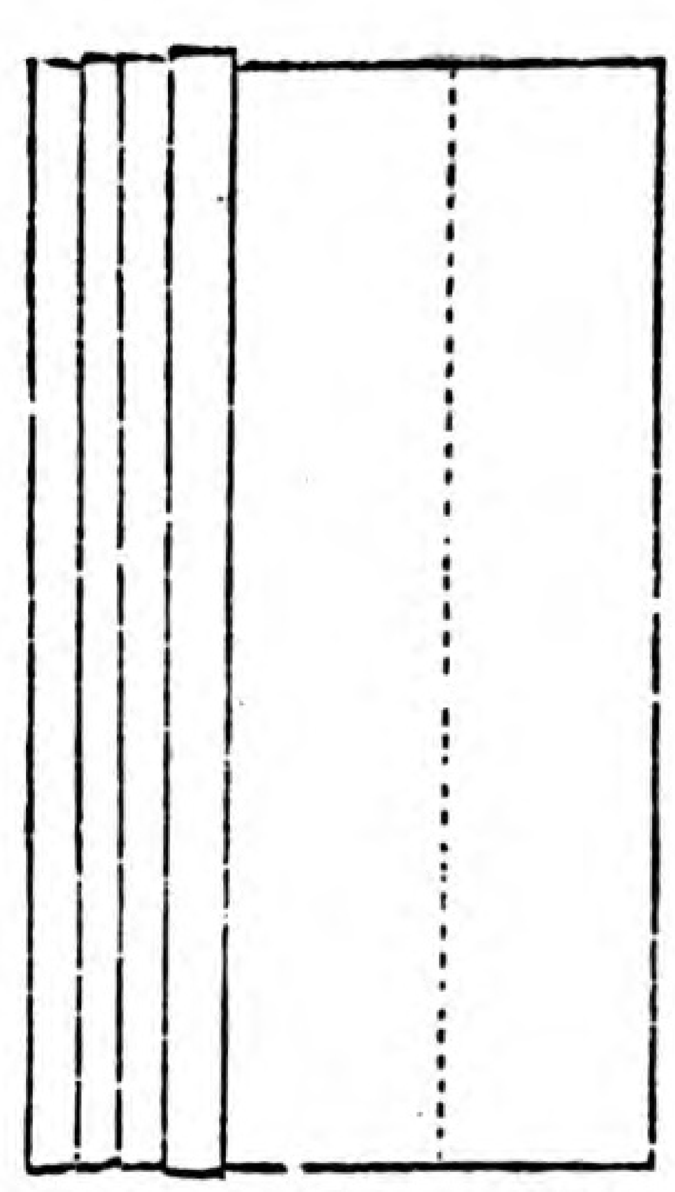
綿包

ゆひわたを包むなり。

上書は、眞綿何把など書くべし。



仝じく右を啓きたる圖



點線は開きたる折目を示したるものにして、左方に並びたる線の中最も左の端の方の線は右に向けて折りたるにて、最も右の方にあるものは、左に向けて折りたる線なり。其の中間に在る線は、壁襀にして、左より二番目の筋は、紙の端を示したる也。

茶の湯

炭手前（前號の續）

孤峯庵不羨　閑葦雄

次に右手にて火箸を取、右の膝頭の側に突立て持べし、但火箸の首頭一寸手の上に出を度さだむ次に、下火を火の上に溜る白灰を能拂ひ落し、前の方へ積み直し、風爐の中、下火の多寡に隨ひ、炭斗の炭を置べし、一に胴炭を入、但向の方次に管炭、次に毬打、次に枝炭を入べし、但都合により枝炭を入れて後ち點炭を脇へ毬打炭ん代用して入ろべし活用第一也次に火箸を炭取に入、左膝を一ト膝跡へ引、左手にて後の灰器を持、前の方に出し、右手にて持、右膝と一ト膝引て、左膝と等しくなして、前に灰炮碌を置、右手にて灰匙を持、左手を添持直し、但灰匙は下より持、左手を腕に添、前土器の前の處を三日月形に取て其灰は向の方へ入灰匙にて炮碌の灰を上より押付け撫でさすれば灰平等に成たる處を灰匙にて右より左へ押しよすれば、コケラの如く成たるを前に三日月に取たる處を見へす、見ゆるそ様に灰を容へし向口傍其の灰匙は、炮碌の中へ入但仰向右手にて灰炮碌を持、左手へ持替、右の膝の一ト膝前へ進め、始め置たる如く、後の方に置、直に左膝を進め、右膝と平等になる、右手にて羽箒を取り、左手を添持直し、風爐の緣を始如掃べし、直に、炭取へ掛け、右手にて香合を取、左手の掌中に載、右手にて香合の蓋を膝の前に置、火箸を取、最初如持直し、香を挾み、火中へ一片、火の移りたる時可薫處へ一片炷すべし。次に、火箸を右膝の脇にて突立、如始持直し、炭斗へ入べし、但向を落し前は次に緣へ掛置べし次に右手にて如始香合の蓋をしめて、此時客方より所望あらば其儘持て一覧客の方へ開き香合を茶碗を出す處へ向前さ向を替へて出すべし次に右手にて鐶を取上、左手を出し、始め鐶を掛たる時の如く取扱て、左右と

向前より掛け、僅少廻し、鐶を上げ置き一膝左の方へ開き、（但此時は風爐の正面へ向）次に鐶を取、釜を持上け靜に風爐に掛べし、其の儘鐶を上げ置き、釜敷を右の手にて取り、炭取の上に持來り、左手を添、釜付の方へ裏返して、炭取へ入、次に左右の手にて鐶を持、釜に曲りあらぬ鐶を捻りて能々直すべし、直に鐶をはづし、左右一時に合せ、重り目に差違なき様に注意し、右手にて炭斗の中を見斗適宜の塲へ入れ置くべし、次に羽箒を右手にて取、如始左手を添へ持直し、釜の蓋を向の方を右より左の方へ掃廻し、前の方も同じく右の方より左の方へ掃廻し、左の方を下へ掃落すべし、直に其の羽箒は、左手を添持直し、炭取へ掛置き、次に左の膝を引、後に置き付たる灰炮烙を、左手にて取、前の方へ廻し、右手に持替、左手を下に添、其の儘両足を爪立、膝を一足に切立て、右左右と三足引、右へ廻り、勝手へ入、炮烙を水屋の棚に置、再出て、炭取の前に座し、左右の手にて炭取を持入べし、其の炭取水屋の棚に上け置、又香合 客方より戻るの塲合を見斗出て、風爐釜の正面に座し、右手にて釜の蓋向の方を些少明掛け、次に客方の正面に向ひ、一禮香合を取、左の掌の上に載、右手を添て持、勝手へ入るへし、右畢て、宗匠に一禮、次に水屋に至り、炭斗の炭を組直し、元の如くして通し、棚へ上げ置くべし、尤、香合は、炭斗より出して別に置くべし。

編者曰、本誌百四十四號、炭斗水屋にて炭仕組方を示す處に、火箸の次に釜の鐶を入、（但し炭斗ノ中見斗合目ヲ上ニシテ入置ヘシ）次に羽箒と云順序なるを脱落したり、依て更正誤す。

女禮

禮節教授　有住常子

握手の禮

この禮は、おもに、外國にて用ゐたるゆゑに、其の國のみの禮のごとくおもふめれど、さにはあらず。本邦の古き時代に、いと親しみたる間に用ゐられ侍りたりし禮なり。さあれど、外國ぶりとのみ思ひなしたまひそ。

稽古の仕様

今俗にいふ、西洋館づくりの所にて、なしたまふ心もちあるべし。

まづ、横座より進み入て、其の儘に立止まりて、左右の手を、膝の上部につけ、頭をたれつゝしみて、横ざまに、人御前の方を伺ひて、双手を、膝より下にたらして、禮をなしたまふべし。

さて、左より進みたる時は、右の足を、左の足の爪先にかぶらせて、左足を踏そろへて、左足より進みゆくなり（此時も双手を膝の上部におきて、裾をよするやう、つゝしみて歩みゆくべし）

御前、三尺ほど手前にて、立とゞまり。

とゞまる時、ほどを見斗ひて、止るべし。

右足を、一足あとの方に引て、右膝を跪きながら、左膝はたてたるまゝ、右の手をいだし、左の手を左膝におきて、貴人の御手いだしたまふを、そつといたゞき、御手ひきたまへど、左の手は膝の上に、右の手を右膝の上におき、たちあがりて、左足をあとに引て、右とそろへ、さて、右左と二足、足のたけほどづゝ引て、次に、右足を、左足のあとの方

に、横に引て、次に、左足を、右足の爪先に、竪につけ、右足を踏そろへ、左足よりあゆみて去りぞくべし。

○又右より進むべきときは、左足を、右足の爪先にかぶらせて、右足を踏そろへて、左足より進みゆくべし、其のほか、ことなる事なし。

○又両人一同になす時もあり。こは右の様にて、左右の心得あるのみなれどむかゝずかし。

人前を通る禮　片かはの禮（右坐）

稽古の様

下座より進みゆきて、人前より下の方に至らで、左足を半足ひきて、左膝右膝共につきて、右膝を、膝頭に手をおきて、おしてあとの方へおしはく、左膝をも、膝頭に手をおきて、おしてあとの方へすこしひき合せて居る、引合す時に、人前むくやう心すべし。

さて、左右の手を、禮をすべき様に、頭をさげながら、まをけて禮をなすべし。

禮をはらで、右左の手を、前にひきながら、頭をもたげ、右膝頭に右手をつけて、おして引ながら爪だち、左膝もかくして、爪立て、立ながらに、右即ち貴人居給ふ方の手にて、右裙をおさへ、裙風たゝぬやうになして、屈たるまゝ、人前をすぎゆくなり、左手は膝の上につけてあるべし。

さてすぎて、二三尺になりたる時、ますぐに立て、あゆみて渡るべし。

○右座にゐます時は、左の手を裙につけて渡り侍るべし。

其のほか、右にならひてなしたまふべきなり。

同　兩側の禮

すゝみ出て、おまへの手前にて、左足を、半足ひきて、左膝右膝、共につきて、右の膝に右手をそへて、ひきてかゝとをおろし、左の膝に、左の手をそへて、ひきてかゝとをおろし、左右の手を禮まをすやうに、頭をさげながらおまへ侍りて、なかむにて、右座左座と、御膝のあたりを伺ひ、御禮まをすべし。

さして、かしらもたげながら、左右の手を、膝の前にひきて、右膝に右手をつけて、ひきてつまだち、左膝もかくしてつまだち、立ながら、右左ともに、裾のあたりをおさへ侍りて、かゞみて、人前を渡り侍るなり。

二三尺すぎて、立なほりて、あゆみゆくことことにしづかになすべきことにぞ侍る。

上の位の人はしり侍らねど、中、下の人は、人前をとほるすべも、しらずして、御後をすぎ、又御後をしひてとほり侍るなどするは、いと〳〵見にくきことに侍り。

たちぬひ

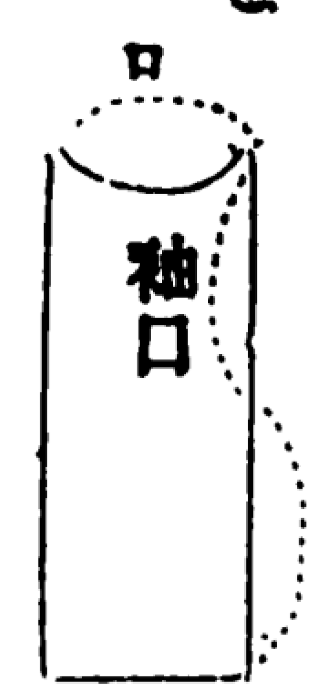
西山たい子

（八〇）襦袢筒袖の縫ひ方

襦袢の筒袖は、大人小供によりて、大小異れど、大方、大人並なるは、木綿巾にて一尺一寸ばかりの切れあれば出來るなり。袖口切も、並なるは、六寸五分の長さにて、巾一寸より、一寸二三分の切れ、二つぶりあれば出來るなり。

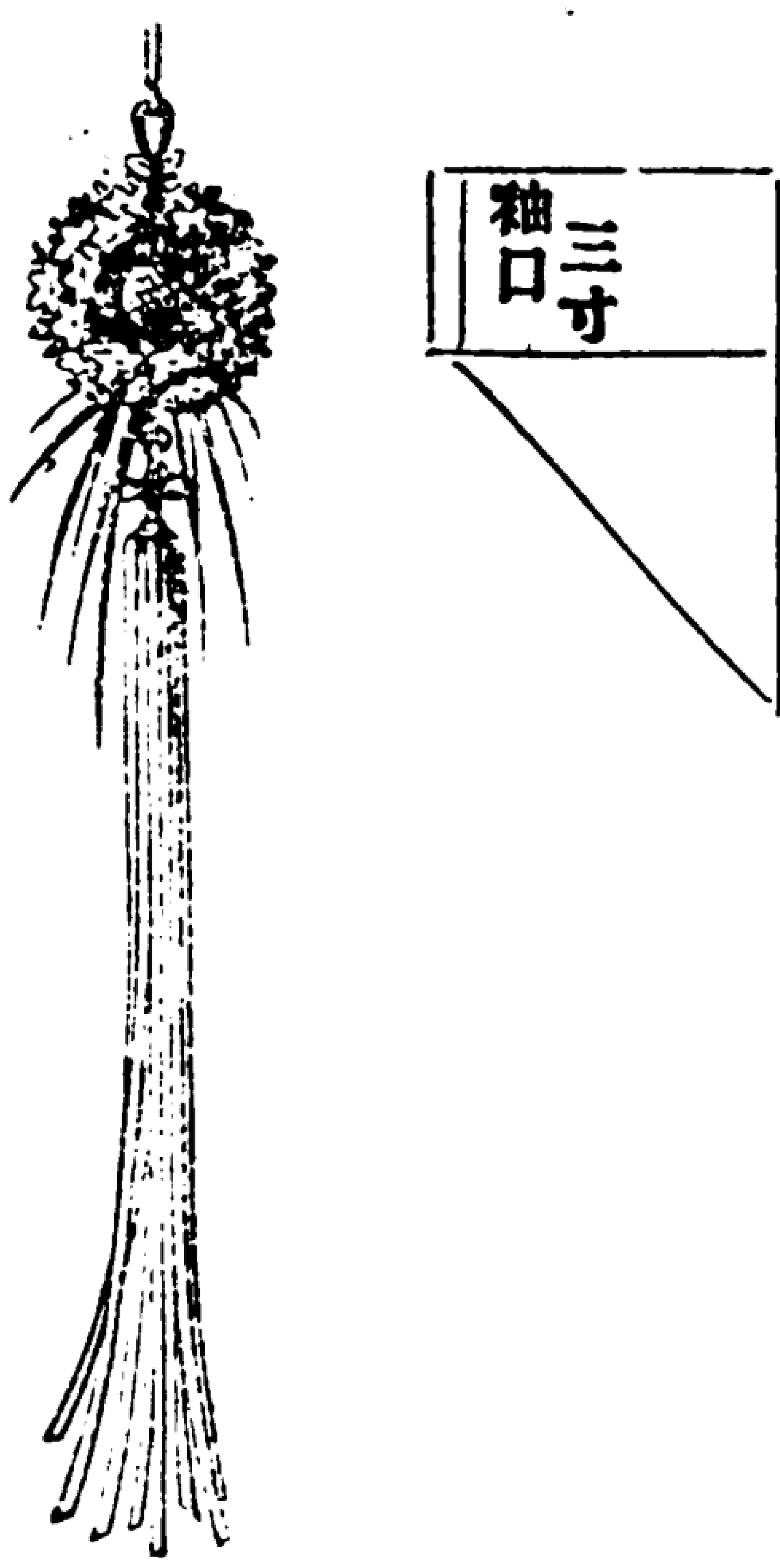
まづ、その木綿巾の切れを、半巾に眞二つに切り、

裏も同じに切りて、裏表の切れをよく合せて、袖口あきを定め、



上圖の(イ)印の處を、裏表合せたるまゝ、(ロ)印の裏表の間にはさみて縫ひ、引きかへし、袖口の切れを袖口に合せて輪にぬひ、そのぬひたるものを、袖口の表がはに廻してぬひつけ、裏にかへして絎るべし。但、同じ袖の出來ざるやう、初め表を上にし、袖口の方よりぬはゞ、次はやはり袖口の方より裏を上にしてぬふか、或は、表を上にし、付の方よりぬふやうに、よく注意すべし。

その圖



造花

共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

柿

花の造り方　花瓣には、羽二重、又は寒冷紗を用ゐ、第百四十三號に示したる琵琶の花と仝様にして、尚夫よりも小く斷ち、「オウラミ」にて瓣の元より漸次に先を薄く摸糊し、瓣鏝の極小さきものにて、實物を見合して適宜に鏝をあて、后、琵琶の如くして之を蕚に着く。蕚も、琵琶と仝じ様に造れどよし。蘂は、カタン糸を二三本集め、其の先に菓子種を糊にて着け、此の先を、「オウラミ」と「グリン」とを等分に合せたるものにて薄青くそめ、長さは、蕚の中より一

分ばかり出でたる位に、極短かく斷ちて、花の中に挿し込むべし。

實の造り方　先づ、赤ねば土を採りて、之に川砂を加へ、少しく水を入れて固くねり合せ、是にて、實物に參照して、好みの柿の實形を丸め造り、能く乾して后、其の上に、白紙、又は、反古紙にても二三枚水ばりし、紙の皺は元の處に寄せあつめ、其の上を竹の篦にて撫で迴し、能く乾して、尚其の上に、半紙十四五枚を濃き姫糊にて、余り皺の寄らざる樣貼り付け、火にあぶりて能く乾し、后の實の頭の方より縱の線目に合して、元の處まで切りはなし、(尤中の土形を余り傷けぬ樣心すべし。)中の土形を取り出して、后、再び切り目を合して、細き紙に濃き糊をつけて、貼りつけ、さて實の元に竹の串を挿し込み、こゝを持ちて、其の實全体に、胡粉を膠にて溶したるものを二三度塗りつけ、乾きて后、其の上を木賊にて能く摩擦して光澤を出し、之を「オレンヂ」(黄色の繪の具)にて色染し、尚之に赤味を帶ばしむるには、「ヨウシン」を薄く溶きてぬるべし、能く熟したるものは「ヨウシン」を濃くぬればよし。さて、さざ柿を造るには、筆を元までおろして、能く墨をふくませ、半紙等の上にて、此の筆の先をさゝくらかし、墨を少くして、之を柿の實の頭にあて、一二回筆を迴して、不規律なる數多の輪を畫き、斯くして后、亞膠を其の上に三度ばかりひき、最後に、亞拉比亞護謨を水に溶きて塗りつくべし。蔕は、寒冷紗を、「グリン」三分「オウラキ」六分「コセンダ」一分を混じ溶き、尚此の繪の具に五倍の量の明礬を加へたる液にて染め、薄糊を兩面にひき、之を實物に見合せて、適宜の形に斷ち、角々の處を少しく濕して

引き延し、以て皺を造るべし、中眞の處は、辨鏝にて凹ますなり。さて、前に實に插込たる竹の串を貫き取りて、其所に、此の帶を薄糊にて着け中眞に穴をあけ、前の竹の串の代りに、太き針金に「カシトラバル」にて染めたる紙を卷きたるものを插し込み、糊にて固定す。

葉の造り方　伽羅子を、前の帶と仝じ繪の具にて染め、其の兩面に、糊をひき、實物に合し、枝に應じて、大小適宜の形數枚を造り、針金に青紙を卷きたるものを裏より着け、表より實物の通りに、筋鏝にて筋を入れて、其の筋の間々は、裏より、辨鏝にてふくらますべし。纒めの紙は、「カシトラバル」にて染めたる紙にて、好みの恰好に造るべし。

だいどころ

殘物の料理方

人數の豫定よりも減じたるため、意外の殘物を生じたる場合に於いて、其儘之を用ゐんとするも、洋食にては、總て、肉類は冷却し、脂肪は凝固するをもて、到底、之を喫すべからず、去りとて、全く、之れを饉やさんは、不經濟のきはみなれど、洋食調理に於いては、是非とも、殘物料理方を欠くべからず、且、洋食に於ては、意外の殘物無き場合にても、料理の性質として、鳥獸肉類の零餘斷片を出だすこと少からず、是等を、すべて打棄てゝ、洋犬抔に與ゆるは、經濟に叶ふものといふべからず。然れど、右の零餘殘物をもて、美味なる食物をつくり、一家の

人々に供するは、主婦のつとめといふべきか。よりて、茲に二三の殘物料理方をかきつくべし。

燒殘の牛肉と蠣の調理

燒殘りの牛肉を能程にきり、之れを蒸鍋に投れ、牛酪、刻みたる玉葱、胡椒、食鹽とを加へ、牡蠣の汁を注ぎて、三十分間程煮たる頃、別器に、米利堅粉、少量を、葡萄酒と、牡蠣の汁にてとき、之れを鍋の中に投れ、同時に、牡蠣のむきみを投じ、能くかきまぜて、火にかけ、沸騰ちたる後、火氣を減じ、凡四五分間煮て用ふべし。

燒家鴨と豆の調理

燒家鴨の冷ゑたる肉を能程にきりて、之れに牛肉の煮汁、胡椒、食鹽を加へ、文火にて十四五分間蒸煮になし、同時に、能程の青豌豆を、武火にて十二三分間ゆでたる後、笊にあげて、水氣を去り、鍋に戻し、(豆をあげたる後、湯をこぼし、鍋を洗ひ置べし)之れに、牛酪、砂糖、米利堅粉少量つゝを和し、能くかきまぜ、文火にかけ、五六分間煮たる後、煖ためたる皿の中央に盛り、其まはりに、家鴨の肉を添て出すべし。



秀歌集（九）

鹽井正男

○

わが宿は道もなきまで荒れにけり
　　つれなき人を待つとせしまに

○此の歌は古今集の十五の巻にありて、僧正遍昭

のよめるなり○道もなきまで。住居に通ふべき道も無くなれるまでといふことにて、草などおひ茂りて住居にかよふ道も埋れたるなり。○荒れにけり。荒れたワイと歎息せる詞なり。草など生ひしげりて荒れはてたるなり。○つれなき人。同情なき人のことにて、われは、其の人を戀うて待ちてあるに、其の人はわれを思はずして訪ひも來ぬ故に、つれなしといへるなり。○まつとせしまに。待つとしたる間にといふことなり。

○一首の意は、我は待つに、人は來たらず。さる同情なき人を、來るか來るかと思うて、待つとしたる間に、我が宿は、住居に通ふ道も無きまでに、草などおひ茂りて、荒れはてゝしまつたワイといふことにて道もなきまであれにけりの上の句、我は唯其の人をのみ戀うて居ること、さるに其の人は絶えてつれなくて、終に來もせぬことを、かく形容してあらはせる詞にて、誠に、面白きいひざまなり。一首の上、何となうやさしくあはれに、よく歌のさまを得たりといふべし。

○

君が行く越の白山知らねども
　ゆきのまに〳〵あとはたづねむ

○これは、古今集の離別歌の部にありて、大江千古といふ人が越の國へまかりける時の馬のはなむけとて、藤原の兼輔朝臣のよめるものなり。○越の白山。越とは、今の北陸道あたりの北國を、すべて、昔は越といへるなり。白山とは加賀の山名なり。

○越の白山知らねども。越の國は知らねどもといふ意なるを、白山は、そのわたりの有名なる山な

れど、それを取り出でて、且、知らねどもの志らにいひつゞけて、志らを重さねて、調べを面白くしたるなり。○雪のまに／＼。雪のあるに随ひてといふことなり。

○跡はたづねむ。貴方のふみゆかれたる雪の跡をたづねてまゐらむといふことなり。

○一首の意は、貴方が行かせらるゝ越の國は、白山ももとより、更に存知ませねど、北國は雪の深き所のよしなれど、雪のあるに随ひて、貴方がふみゆかれたる雪の跡をたづねてまゐらむといふことにて、越は雪の深き所なるより思ひつきたる詞にて、面白き趣きを得たる歌といふべし。

その所にかなひて、殊に越の白山志らねども、と、志らを重ねなる調べ、誠にいふぞかりなし。

○

思ひやる越の白山志らねども
　一夜も夢に越えぬ夜ぞなき

○これは、紀の貫之が越の國に在る人へいひやりたまへる歌にて、古今集の雜歌の部にあり。

○一首の意は、わが思ひやる貴方の住むで居らるる越の國は、白山ももとより、すべて私は存せねど、貴方の事を思ひやりて、心は常に越の方へ通ひて居ります故に、夢には、毎夜／＼その白山を越えてまゐりまして、一夜でも、其の山を越えてゆく夢を見ない夜は御坐りませぬといふことにて越の白山知らねどもといふ詞づかひは、前の兼輔朝臣のと同じく面白き手振にて、且、それより下の句に越えぬ夜ぞなきといひたるなど、誠に文なせる手振面白し。

かたみこそ今はあたなれこれなくも
　忘るゝ時もあらましものを

○これは、讀人知れず、古今集の十四の卷の末にあり。○形見。その物の形として見るべきものといふ意にて、故に、人の別れゆく時に遣しとゞむる物、或は、亡からむあとにとゞめおく物をかたみといふなり。

○今はあたなれ。今はわが身の敵であるといふことなり。○これなくも、この形見あらずともといふことなり。○忘るゝ時も。その人を忘れむ時もといふことにて、もは意をつよめる助詞にて、輕き歎息をふくむなり。○あらましものを。あらむものなるにといふことにて、さるに、反てその形見のある故に、それを見ては思ひ出し思ひ出して忘れかたしといふの情をあましたるなり。

○一首の意は、この形見は、今は反て我が身の敵といふべきものである。この形見なくも、さすがに思ひ忘れん時もあるべきに、なまじにこの形見のある故に、それを見ては思ひ出され思ひ出されて、更に思ひ忘れがたしといふこゝろにて、切情誠に掬すべき歌なり。

○

白雪の絶えずたなびく峯にても
　住めぞすみぬる世にこそありけれ

○これは、古今集の十八の卷にありて、文徳天皇の第一の皇子なる惟喬親王と申したてまつるが御歌にて、此の親王一の皇子の御身を、思ひの外の世のさまにて、小野の山の奥深く、世をのがれはてたまへる御山住居にてよみたまへるものならむ。○絶えずたなびく。間なく常に白雪のたなび

くことなり。たなびくはなびくと仝じくして、たは語調を助けむ爲めに添へたる詞なり。なびくは横に引くといふことにて、雲が峯になびくとは、雲が山にかゝるけしきなり。○すめばすみぬる。斯く住む時は、斯く住みも來たれるといふことなり。○ありけれ。あるワイと感じたる詞なり。

○一首の意は、間なく常に白雪のかゝる高根にても、こゝを住家として、かく住めば、かく住みも來たれる世の中ではあるワイといへるにて、かゝるきはの御身にて、かゝる御歌詠にいふばかりなくかなしくおぼゆるになむ。



ふゝくろ　第五稿

下田義天類評論

原文縣居翁作

第九

をちきひも、けふも、御示よろづ承り悅びぬ。御歌ども筆くはへつれば皆かへしまゐる。御庭の菊賜りし興に入り侍り、そこなはすもてまゐりてなむ。

さるは、此のむゆかにはわたり給はむとよ。愛らしく、しげしげ對面奉らむと悅びぬ。此のたびは、過し如く、裝束の本を專讀み給はむや。又、萬葉集などよみ給はむや。其の由能く御許にて仰せ合せられ候て御下り候へ。

日ごとに讀み給ふとも、さのみ久しくもれはすまじけれど、いくらもはかどり侍るまじ。されど、かた

附て、いつれとも御望のごとすへし。さうそくの事も、委しくとては限りもなし。過し日の如く、一通り打ある事を先まをし候はむなり。また、萬葉を知り給はでは、歌をよみても、たゝちひさきたくみのみに心入りて、大らかに器量あるさまに出來ぬものなり。

（翁か萬葉風を主張せし以所は、實にこゝにあり。いたづらに、古人の口眞似をしたるか如く思へる輩は、皆皮想の見解のみ。近來翁の歌風を名づくるに、擬古體の目を以てするものあり。それ、皆、この皮想論者なり。萬葉を目的とすれど、言語風體のうつから、萬葉に類似せむ事は、勢の然らしむる所なりと雖、其の旨とする所は、所謂、後世のちひさきたくみを去りて、上代の大らかに器量ありし所を取らむとしたるものなり。即、其の内容の着想方を學むむとしたるものなり言語風體の類似したるは、餘勢のみ。其の本旨には非らざるなり。古人の口眞似を能事とせざりし事、本書第三稿中に、人々の思ひよる所を避けしめたる垂訓ありしにても察すべし。翁の詠歌は、皆、この人々の思ひよる所を避られたるものなりと雖、其の大らかに迫らざる所を採擇せられたるが故に、一見、其の斬新なる所を見認め得ざるものあり。これ、必竟、見る者の見識、未其の堺に達し得ざるに座せるものなり。翁の歌學の本領は、いたづらに、古人に擬せむとしたるものにはあらざるなり。余は、翁の爲に、彼の擬古體の名を徹回せられむことを希望する物也。さて、其の大らかといふに、兩樣あるべし。

大らかとは、俗にいふ大やうなるなり。それに二

樣ありとは、諸事に無感覺にて悠然たると、度量寛大にて泰然たるとの二樣なり。甲は氣付ずて能はざるもの、乙は心到りてせざるものなり。翁の望まれたるは、實に此の乙者にあれ。この心を以て、小局を捨て、其の大體に眼孔を注げとの教なれ。たとへば、花を見て雲かとうたがひ、月を詠めて霜かとあやしむは、其の大體なり。一ひらの落花を蝶と見立て、露滴の反射を玉と愛するごときは、其の小局に拘泥せるものなり。此の大體を取ること、即、大らかに、器量ある事は、萬葉以上の歌の特色なり。この特色を學ばしめむ爲に、萬葉風を主張したるに過ぎざるなり。

されど、歌は、其の人の心の反射なり。人によりて、さま〴〵の風あるべきは勿論なり。決して、一樣なるべきに非らず。而して、優美、壯麗、雄健、閑雅、素より其の上乘なるものなりと雖、纖巧綴密、能く其の造化の工を奪ふもの、決して、其の下位にのみ立べきものにあらず。中古の歌人は、此の歌の體を、凡十體と定められたり。尤、貫之朝臣は、六義を變化して、六體とし、公任卿は、貫之の六體を破りて九品としたれど、基俊朝臣の悅目抄以來は、俊成定家の兩卿をはじめ、當時の、先達に聞えたる人、大方この十體說によれり。所謂、十體とは、幽玄體、事可然體、濃樣、有心體、長高き體、見樣、面白樣、有一節樣、艶樣、拉鬼體、の十體これなり。(今手許に參考書なくて、暗記の儘を記したれば、其の順序は、勿論名目の文字にも、或は相違あらむか。されど、其の意は、違へざる積なり)

人々其の所長の特性によりて、各〳〵、此の十體を目

的として練習せり。而して、この十體の何にも倚らず。しかも、十體の何をも備へたるを秀逸の作としたりき。　後鳥羽の院天皇の御時、十體の姿の中にて、いづれを最上の姿とすべきかといふ事を侍臣に討議せしめられたるに、人々有心體の呼聲高かりしも、終に、決する所なかりし由、定家卿の愚秘抄に見えたり。いづれにも一方に偏す可からざる事、以て察すべし。翁が、其の大らかに長高く、しかも、拉鬼のいきはひある所をのみ主張したるは、一に斯文を以て、浮華文弱に流れたる人心を恢復せむとしたる一轍心に誤られたるものなるべし。翁の詠歌は、誠に、敬伏の外なし。されど、門人をして、皆、翁の如なからしめむとしたる一點は、この翁の爲に、頗、遺憾とする所なり。余は、この點につきては、かへりて定家卿の所論によらむとするものなり。因に、こゝに、定家卿の歌論をいふべし。

京極被進衣笠狀にいはく（此の書は古今深秘抄、及和歌六部抄等には、和歌庭訓とし、單行本、及七通書、群書類聚等には、毎月抄といへり。然して、二條家の諸抄によれ、多く京極被進衣笠狀の名を用ゐたり）

先にも記し申候ひし十躰を、人の氣の趣を見て授く可きにて候ふ。器量も器量ならぬもうけたる其の躰侍るべし。

或は幽玄躰を稟けたらむ人に、拉鬼躰をよめと敎へ、又長高樣を得たる輩に、濃なる躰ををしへず、何か能くし候ふべき云々。

我が好むやううけたる姿なれぞとて、此の躰を詠めど、得ざらむ人に敎へ候はむこと、かへすがへ

す、道の魔障にて候ふべし。其の人のよめらむ歌を、よく／＼見したゝめて後に、風躰を授くべきにて候ふ。

何の躰を詠まむにもなく、正しき事は渡りて心にかく可きにこそ。されども、又其の躰に入り伏して、餘躰を捨てよとにては候はず。得たる所を地盤として、正位に詠み据ゑて、さて、余の躰を詠まむは、苦しう候ふまじ。たゞ、正路を忘れて、あらぬ方へれもむくを愼しむべき事とぞ、覺ゑ侍る、今の世にも、肩を並べて、互に達者の思をなしたる輩も、多分此の趣を辨へ兼ねて、唯々我が詠むやうをまなべとのみ敎ふる事、無下に道を知らぬにて侍るべし。若我より越ゑて、物をも高く案じすぐれたる姿を背と詠まむ人の有らむに、かやうに提撕しては、何か宜しく侍るべき。云々。

と云へり。誠に、卓論と云ふべし。此の論より云へど、翁の提撕せし所は、少しく遜色なきにあらず。されど、またこの論を實行せむとするに當りては、豫め、一個最高の目的とすべき所を指定し置かざる可らず。初心の間は、大概五里霧中に彷徨して、自己の立脚地をも知らざるものなり。況むや、十體の姿をや。宜しくこれに授くるに、最高の目的を以てすべし。さて、口調もかたまり、詠歌の姿も、一渡りとゝのひての後に、はじめて其の人の特色も顯はるべし。翁の論は、その特色の顯はるゝまでの手引にて、定家卿の論は、最終の敎授方と見ゑ、互に抵梧する所あらざるべきか。故を以て、かの定家卿も、亦、その一方には、自己の好む所を明にせり。

同書にいはく。

何も知れねど、おながちに大事になり侍るならひなれども、ことに此の道は、さと覺え侍り。我が心の中にて、歌の昔今を思ひ合せて見るに、古よりも當時は、殊の外に、詠む歌毎にわろくのみこそ覺え候へ。これはと思ひていだすは稀にぞ侍る。抑、歌は、いよ〳〵たかき事に侍りけりと、先哲の庭訓も今こそ思ひ知られ侍れ。先歌に秀逸の作と申す可き姿は、萬機をもぬけて、物にとゞこほらぬ歌の十體の中のいづれの體とも見えず、しかも、又そのすがたを、皆揷はさめるやうに覺えて、餘情うかびて心直く、衣冠正しき人を見る心地するにて侍るべし。常に、人の秀逸體と心得て侍るは、無文なる歌のさはさはとよみて、心れくれたけのあるをのみ申ならひて侍る。それは、不覺の事にて候ふ。かゝらむ歌を秀逸とだに申すべくは、歌ごとにもよみぬべくぞ侍る。

といへり。其の秀逸の標準とせし所は、翁と比して圓稜曲直長短廣狹の相違こそあれ。後進者の爲に、最高の目的を指定し置かむとしたるは、翁も。定家卿も、同一手段なりといふべし。これ、必然らされむ叶はざる理の其の間に存すればなるへし。さて、定家卿は、これを理想によりて示し、翁は、これを萬葉といふ實物によりて示せり。但、その標準の程度に至りては、これを仔細に研究する時は、兩者殆相反目せる姿なきにあらず。これ、兩者、その好む所をことにするより起れる所なるべし)

よりて萬葉といふものを、一わたり讀みて、所々、心得給へど、心廣く言葉直くなるなり。

(心を廣くせむことは、前段に開說せり。また其の

心廣きのみか、詠歌の本旨に非ざる事をも、前段に附說したり。よりて、こゝの言葉を直くせよといへることをも、一言し置くべし。定家卿の詠歌大概には、

詞以レ舊可レ用。詞不レ可レ出二三代集先達之所一レ用。新古今古人歌可レ用之。

といへり。これもまた、其の直きを欲してなり。上代は、詞直く、末代は詞に屈曲せるもの多し。故に、其の曲れるを措きて、直きに據れと敎へたるに過ぎず。三代集は勿論、萬葉集と雖、其の用語悉直く正しといへるには非ず。末代の詞といへども、悉惡しく曲れりといへるには非ず。概して、舊きは正しく、新きは正しからされど、其の正しきに據れとの敎なるべし。其の精神を忘れて、皮相に拘み、萬葉といへは、皆正しきものと誤想し、三代集といへど、皆よきものとひが心得して、其の內の難語不正語をも擇ばず。かへりて、これを用ゐてはこりがなる者さへあるは、言語同斷のしれわざなれ。このさかひを既く見出したるは、今川の了俊なるべし。彼が和歌所へ提出したる異見書を見ど、近世の詠歌改良論者が、舌を卷きて歎賞するものあるべし。されど、今の改良論者のごとく、亂暴なる言論には非ず。能く、詠歌大概の神髓を得たるものといふべし。其の後これに讃同したるは、細川幽齋なり。了俊の異見書は、言論に稍弊ありて、誤解の恐あり。幽齋の大概抄の論、穩當にて、能く其の意を盡したり。よりて、今は、其の一節をかりて、左に引證とすべし。

幽齋の詠歌大概抄にいはく。

いかに三代集の詞たりとも、惡からむをば、これを

用うるに足らず。古今にあれどとて、殘なく散るそめてたき、わびしらにましらな啼きそ、散りぬてなり、此類なり。また、三代集の外に詠坐す詞たりと云ふとも、その害なき物多し。されど、是は、學者に惡き詞を除かしむべきのいましめなり。さて、また、新古今、古人歌同可レ用レ之とは、三代集に准じたる詞の心なり。所詮三代集を出へからずといへるは、作者の思の所心のきはもなきまゝに、其の限量を出せるなるべし。云々。

所詮三代集を出べからずといへるは、詞の正しく、玄かも、きよらなるを以て作り立れど、心も氣たかく成りて、しかも、新しく、感深き物なり。凡、世上の人の上も、多くは、詞つかひにて、其の人の心、優にもやさしくもなるものなり。況、和歌は、詞第一なり。寂蓮かかるもかく伏す猪などいへど、おらけなき猪の獅々などいふ物も、やはらきうつくしく聞ゆといへるも思ひ合すべし。

といへり。翁が萬葉を見て其の詞を直くせよといへるも、この心より外なかるべし。よりて、この論をかりて、本文の意を明にせり。舊き人の言論もて、新らしき人の言論を解釋せるは、何となく事理を顚倒せるが如き感なきにあらねど、翁が言語の爲にも萬葉を見よと敎へたりし所に對し、余がいはむとする所は、全くこの幽齋の論と同じけれど、暫くこれをかり來るのみ）

たまきの君の方こそ其の心にかなひ侍りぬれど、いよゝろの本を知りて仰せ合せられむがよく侍るべし。

これ、翁がその人を見て提撕したる所

又、鎌倉の右大臣集をも持てれはしませ。萬葉をよ

く取なし賜へる歌とも成れど、事のよし教へ聞ゆべし。古今集は、蒼生子のよみをはかりしにや。一通り聞き給ふはよきことなれ。されど、それが中には、古き歌多し。其の味を物がたり申してむ。さる御心掛もし賜へ。此等の事御共々仰合せられてよ。御望の儘にすべし。何事も、近くたいめにとて殘しつ。

正誤ふくろ第四稿三十三頁下段九行めゐ中はゐ中の誤。
取消文中思ひ遂ひし處あればは思ひ遂へし處なればの誤





浮世いかだ舟（つゞき）

作者不詳

●宗旨をたづぬる事

今はむかし、浮世坊、いざなはれて行きて見れど、大なるやかたのうちにいりぬ。折ふし、主君御うちにおはしますか、かうかうのよしを申上げけれど、さらばとて、御め見ゐせさす。主君の仰せに、お坊主は何宗ぞとたづねらるゝに、浮世坊こたへて申やう、それがしは、上戸宗にて侯といふ。めづらしき宗旨かな、いづれの經より出でたるをしへぞとの給へぞ。醉經に出でたりと申。それは何れの佛のせつ

ばふずとの給へば、酒によらいのとき給へりと申。つとめの行には何をいたすとひ給へば、たゞいう鋼をつまぐり、ぢぶろくじのみやうがうをとなへ奉るとこたへしかば、主君大にをかしがり給ひ、ちか頃おもしろき御ばうかな、いつまでも是におはしてて物がたりをもしてきかせ給へと有しかば、かしこまり侍べるとて、しばらくとゞまりぬ。

●侍の善惡ひはんの事

今はむかし、浮世坊、此のやかたに身をよせつゝ、すこし心にくつろぐやう覺えし、家中の侍共あつまりていふやう、いかに御坊は、其年いまだわかくおはしますに、道心をおこし給ふは、いかさましさい有べし。およそ、道心をおこすに、ふたつ有り。ひとつには、其の身よろづにつたなく、ばくちけ○○いぐるひに一跡をはつきわび、親のかんだうをかうぶり、しゆくんにおひ出され、ほうこうもならず、職もおばえず、あきなひをせんにはもとではなし、身をすぐる手だてにことをかぎ、飢にのぞむ事の物うさに、かみをそり衣を着し、人の施物をうけて命をつなぐ、是まことの道心者にあらず、世にすてられたるあまりもの也。儒教には、遊民のたぐひといへり。佛教には、禿居士ととかれて、俗にもあらず、出家にもあらず、彼の蝙蝠の鳥にもあらず、けだものにもあらぬがごとし、世のついえになる最上なり。二つには、我が身の無常をくわんじ、後世の大事を思ひしりて、世をうきものにすてはて、道心をおこし、心にじひふかく、人をすゝめて佛法にいらしめ、みづからかたく戒をたもち、行をつとむるをまことの道心といふ。世をすて人とは此事なり。御坊の有さま、何とやらん、はなのさきうろやき、身のふるま

ひも、へうきんさうにみゆ、かまへて萬事たしなみ給へといふ。浮世坊聞て、それがし、道とて世をいとひ、出家とて身をひそむる事、さらに、人にへつらひ、世をわたらんと思ふにあらず、ごせの大事さに、かやうなりたり。それとても、世の中に、出家とんせいじやといはれて、あしき事をいたす者おほければ、それにまきぞへられ、よき道心者も、世の人、心をゆるさぬと見えたり。たゞし、出家道ならず、侍道にも、よきはまれにて、あしきはおほし。もろこし漢の馬援がことばに、虎をゑがきて猫に類すといへり。まことなるかな、下手にかきたる虎は、猫に似るごとく、つくろひそこなへば、わろくなる。今ほど、せけんにて、あの人は萬事へつらひなく、無欲なる賢人かなとほむるその人からを見れば、大かた、みな、禮儀をもしらず、よろづふつゝかなる緩怠をいたし、きはめて、人前に慮外をはたらき、わがいひたき事をいひちらし、人を何共思はぬあふれもの也、又、よく禮儀をしりて、いんぎんをもつて、人をうやまひ、心だてやはらかに、けつこう人なりとほむるものは、みなばかいんぎんをつくし、表裡輕薄のへつらひ者なり。とにもかくにも、うちそとそろひたる、まことの人はなきもの也。たまたままことの賢人あれ共、虎をゑがきて猫にるゐするごとく、つくろひもの也といひたつれど、おのづから、それになるぞかし。およそ、よき侍の生れつきは、まづ親に孝行なるを以て、主君につかへて忠義あり、おちぶれたる人をあはれみ、人の恩をわすれず、友にまじはりてまことあり。よき人をばほめ、あしき人をばそしらず、かゝる侍は、主君のおためを見とゞけて、みづから艱難をかへりみず、正直にし信あ

つし、然るを、其の性あしき侍は、主君につかへてかげひなた有り。めのまへにては利口才覺めきて、ひやうりけいはくをつくろひ、利欲にかたぶき、恩をわすれ、人をそしりて、じひなく、親疎をいはず、物をかすめとり、よき人をそねみねたみ、おしたふさんとす。是らのやつばら、世におほく、はぢをもしらず、人めもはゞからず、主君に追從をいたし、家老のまへにておひげのちりを取、さまぐへつらへど、まことによきものと思はれ、ほどなく出頭人にもなり、知行をも加增せらるゝ、大欲不道の心いよくおこり、なほくこびへつらふ。家中の人々うらやましがりて、みな此の風になりて、心だてきたなく、かたぎわろくなる也。おのくたしなみて、侍道をたて給へといふに、人々げにもといふも有、何をすて坊主めが、口にまかせてさへづるやらんとあざけるものも有り。

●小謠を忘れたる事附武道ぶたしなみの事

今はむかし、浮世坊がとゞまりける御大名の家中へ身上をかせぐもの有り。いか成申たての有るとはしれど、うたひをよくうたひ侍る。聲のよき事、かれうひんのごとく、ふしのこまかなる事、芥子のごとし、うたひの數、千五百番といふ。世の中に、かゝるちようはうは有まじとて、かたはらによびいれ、小謠一つうたはせてきくに、はやそのうちに、道わすれしたり。是にては、何の用にたつべき、召かゝへずなりにけり。是、その藝のぶたしなみなる故なるべし。狗をやしなふ事は、ぬす人をとがめさせんため、猫をかふ事は、鼠をとらせんため也。吠ねざるいぬ、とらざるねこは、そのせんなし。うたひをうたふものとなりて、うたひをわするゝは、何の用

にかたつべきと、家中とり／＼わらひけれど、浮世坊聞て、此者うたひをわすれて、ふちかたをとらでかへりし、すべて、是のみにかぎらず。侍衆の中にも、武道ぶたしなみなる御かたは、みな、此のたぐひなるべし。主君につかへて、輕薄をいたし、へうりをかまへて、つねしようらしく、心だてだうよくに、慾ふかくうそをつき、つねにかうげんはきちらし、うでたてがんこつをれもてとし、禮儀をみだり、人をそしり、じたらくなる慮外者、何ぞ、大事の場になれば人より跡にかまへて、人よりさきににげうろたへては、にげきずをしたゝかにかうぶり、あるはぢをかくものは、みな道わすれのうたひ手なりといふに、めん／＼甘心す。

主從心得草　前編受前

諏訪忠元寄贈

論語に、孔子の曰、君子は事へ易し、説ばし難し、之を説ばするに道を以てせざれば説ばず、其の人を使ふに及んでは、之を器にす。小人は事へ難し、説ばし易し、之を説ばするに道を以てせずといへども説ぶなり。其の人を使に及んで備らんことを求といへり。

此の心は、君子は忠恕なる故に任へ安し、又君子は、道理の正敷を以てせざればよろこばず。小人は忠恕なきゆへ仕へがたし、又道理なき事を以てすれども、已が心にかなへばよろこぶなり。又君子は、其の人の得たる事に任ふ、たとへば、力のつよき者には、ちからの入る事を申付、又物を大事／＼と愼んでする者には、損じやすき、破れやすき物をつかさどら

しむ。小人は、此分別なし、何もかも、一人に申付る。人を使ふ事は、楠正成の心持使ひやうを見るべし、又次下の御遺訓にて考ふべし。

心學五常辨にいわく、從者を仕ふべきやうは、杣人の木を見立るが如し。此木は板に取んか、まさにとらん歟と、案内を見れはせて取ぬれど、始終物の用にたつ、此者は中間に仕わんか、雜色に使わんかと見斗らふて仕ふべし。彼が器量にしたがふべし。叶わぬ事に仕はゞ、誤がちにて、不覺ある時さま／＼に諫むれど、兎角前にてちんするも、片腹いたき事なり。只、初より見斗らふて仕ふべし。泰山は一塊を嫌わず蒼海は細流をいとはずといへり。大人は見斗らふて仕へど、いよ／＼大名になり、人、食物を嫌へど、其の身かならず瘦といふ事あり。是はあしく、彼はあししと、樣々にさいなめど、次第に堪かねて失體出來るものなり。

御明君の御遺訓にも、我身の六根手足を仕ふ心を以て人を用ひよ、目は目の用あり、耳は耳の用あり、鼻は鼻の用あり。たとへど、同し鳥なれども、鷹は空を飛能あり、鵜は水に入て用あり、面々得手不得手あり、一人に何事も備らん事を求むべからず、見る事は目、きく事は耳、嗅事は鼻、味ふ事は舌、行には足、打には手、取るには指なり。然るを、暗き時は目は役にたゝず、耳よし。行時は手はいらず、座する時は足はいらずとて、誰か是を捨んやとの給へり、此の道理を能考へて、人を仕ふべし。

經にいはく、衆生の恩とは、諸人の恩なり。凡人は、人を以て身をたもつ、若人に憎まるゝ時は、いか程智惠才覺あり共、一身守るべき道なし、此故に、人を貴んで、常に假にもかろしめあなどるべからず、

召仕ふ下人も則人の子也、下人なき時は、主人となるいはれなし、是まさに諸人の恩也。此の道理を辨へしらざる人は、いつとなく人にうとまれ、一身たよるべき方なく、終にはろぶべきなり。世の中のものに恩あるといふ證據は、熟々世間にあるとあらゆる物を見るに、恩のないといふもの一ッもなし。尾籠ながら、大便小便は、不淨の第一にて、人の穢がる物なれ共、大小便は、糞の極品にて、五穀野菜を養ひたつるは、此の物の惠みなり。然れど、大小便の恩を思ひなど、御飯時に、糞取の見ゑたるとて、あまり小言はいわれまじ、考へ見るべし。歌に、

箸取らぞ、天地御代の御めぐみ
　父母や主人の恩をあちはへ
炭薪米麥豆にいたるまで
　まづ山賤の汗とれもへぞ

（未完）

安藤惟翁が千年山八境の記

岩内誠一　寄贈

（寄贈の儘）

拜啓貴社御發行の女鑑第百卅六號に安藤惟翁が八境の記文御掲載相成候右は年山記聞より御轉載の事と存候只今惟翁自筆のものと對照するに少しく異れるふしあり文學者の參考ともなりなんと存候左に記載し呈上仕候御用にもたち候はゞ御掲載可被下候

千年山に八境を○む○こと葉

長松軒惟翁

都をいでゝ十とせあまり一とせのはと千年の山の峯のましらに友なひ尾口の里のさと人とまだしみて萬のことのそむ心をやすめひとつの道つらねかまほしかれと（紀聞にはささらまほしかれさゝあり）ひか〳〵しき本性のあらため

がたくてひたすら花鳥の色音にふけりやうやく煙霧のかたくなしき族にふせりなほやむましき心のすきにやそこら見そなはし(紀聞にはてさわり)ふかき洞の戸にかくれてはぬしなき雲をゑるよしにものしさ。が。し。き。岩は(紀聞にはたひらかなる岩ほさあり實際に見るにさがしき岩なり)にうづくまりては。(紀聞には は字なし)よひ〳〵ことの月にうそふきい。さ。ぎ。よき(紀聞にはたゞよきさのみあり)泉にけがれたる耳あらふもかしこかりし人のまねもの。(紀聞にはもの。二字なし)めきてれこがまし草のゑとねれりゐてはにでりにゑまぬ蓮。葉。(紀聞にははちす)をあはれみあるはからうたのれもむきもすゝむにやと谷川の一木はしに雪をながめあるはくれ竹のこみちにたゝずみて心むなしきまじはりをむずび菅原のあ。そ。ん。(紀聞にはおさの)さのみめてけむも色にのみはあらざめり。(紀聞にはづめり)とにはひゆかしく梅が枝をよぢり。(紀聞には り字なし)あるは十あまり三の緒をゑらべてゑつかなる壺の天地をあか

ものとしむるも千とせの山の名にかなふ仙人どし人はいふめりされどかゝるゐなかすまゐもをのれのみかはふしみの里の露にたもとをそほちいをの山べのあらしにくしけつり給ふとはつれやもれはしけるぞ。されどそをまなび。(紀聞にはまねび)たまへ侍るにはあらずて(紀聞には て字なし)をのづから竹の園生にれひたつふしをにくまれ谷の埋木むなしくくちなんもみづからは心やすくて中〳〵うれしきさいはひならし

ゑづけしなひとつ心をなぐさむる
　八のさかひは山ふかくして

(此歌紀聞になしさ覺ゆるれど狩野友竹筆の八境の圖にも題したり)

十一月三日　　岩内誠一



文字知らぬ女房

五十園主人

何れの國といふこと、しらなければ云はず。とある田舎に、富豪のきこえ高き家あり。主は心きゝたる人にて、所の頭ともてあつかはれ、報國恤兵のためにとて、或は日本赤十字社の社員に加はり、或は戰役のをりなどには物など數多獻納して世のほまれも高きほどの人なり。近きころ某といふものさるべき公の所用を帶びて、この地方をも巡回することありて、この家にも至り、刺を通じて、事のよしをいひきこゆる事ありしに、婢出で、取次ぎて入りしが、やがて女房出來りて、けふは折りあしくて、主は家に居ず。明日は歸るべしといふに、さらば復明日訪はんとて、其の日は暮して、あくる日ふたゝび訪らひしが、きのふの婢出で見てまた内に入りてさゝやくさまなり。さてまた出で、今日も主は留守なり、甚些少ながら心ばかりをとてさし出せるは、一厘錢十ばかりを紙に包みたるなり、某心得ずと思ひしが、さりげなき體にて、御志のほどいと恭し。されどかれのかゝるものを受くべき理なく、はた受けんとにもあらず。云々の所用ありて、云々のところより遙々此の地に來れるなり。けふ主人居たまはずば、歸り給はん折を見て又訪ひはべるべし。といひて歸らんとするを、女房物かげながらこれを聞きて、しばし待給へとて、きのふ通じれきたりし名刺を持ちて、あわてゝ出でゆきしが、しばらくありて、主人を伴ひ來たり。主人いたく喜びて、いとあつくもてなしなどして、用事もとゞこほりなくとゝのひたりしことありしと、笑ひながら物がたれりき。この某質素なる人なりければ、其體を見

てものゆすりかなぞやうのものと見あやまりたりしなるべし。名刺の肩がきにもあり、一わたりは事のよしをも述べたるに、この女房あきめくらにて、何とも判斷つかざりしなりけり。かゝる妻もちたる夫常にいかばかり物たらずればゆらん。これ一にても思ひやらるゝなり。いよ〳〵進みゆくなる明治の昭代に生れ合ひながらと妻みづからも、いかばかりか肩みもせばからん。子を持ちたるもの、はた子たるものゆめなれこたりぞ。遠からずして外人も雜居する時も來ぬべきに、ひけとりては、國の體面にもかかはるべきぞかし。



我が身のあだもの

とくみつ

進んで高きに志さんか、高慢の鼻衝突を招がん。退きて卑しきを守らんか、得るを見ては失はんを恐る。世を憂ふれども、其の身にれはばず。身をもかこてば性命ちゞまる。あゝ、我がひとつの心にて、よつのあたものあるをいかにせんいかで、これを拂はんと眼をとぢ、口をむすび、壁に對せるありさまは、坐禪にあらぬかけぼうし、無想無念はいかなもの、時計チン〳〵、汽車ゴロ〳〵、小兒の泣聲笑こゑ、犬、猫、烏、すゝめ、から風の音、雨の音、豆腐のよび聲、いわしこい、ゆふびん配達、新聞の號外〳〵かけまはり、隣は議論法律家、向ふは三味線ちはぐるひ、うらの長屋に病人のうめきかなしむこゑまでも、森羅萬象のこりなく、一々耳に入あひの

鐘にあはれぞつげわたる、有想夢像に日をつぶし、あたら時間をあだになす、これもまがことやめにして、學ぶに如かずとでかけても、こがねなけれど本かへず、うつかり高利はかられない、學校通ひもものうしや、友はあれども皆とほく、親類達はわけしらず、あはうものめとつまはじき、かゝるをりにぞますらをは、いかに功名世に立てん、いかに衣食し住み果てん、われぞどうだろこれよかろと、ふんはつべんきやうするならめ、さはれもへどもこよろぎの、いそぢにちかき年浪は、時節れくれか氣れくれか、若いものには歩をゆづり、使ふ人らは首ひねる、進退谷まる文盲の、埒くち明かぬあだな身は、所詮覺束く方もなし、あゝまだあだに世をすごす、大あだものとなりはてゝ、夢の世くるあだものゝ、そのいましめともなれかしと、我が身のあだものかくぞかし。

才くらべ

逢生屋女史

太田道灌の豪才（十一）

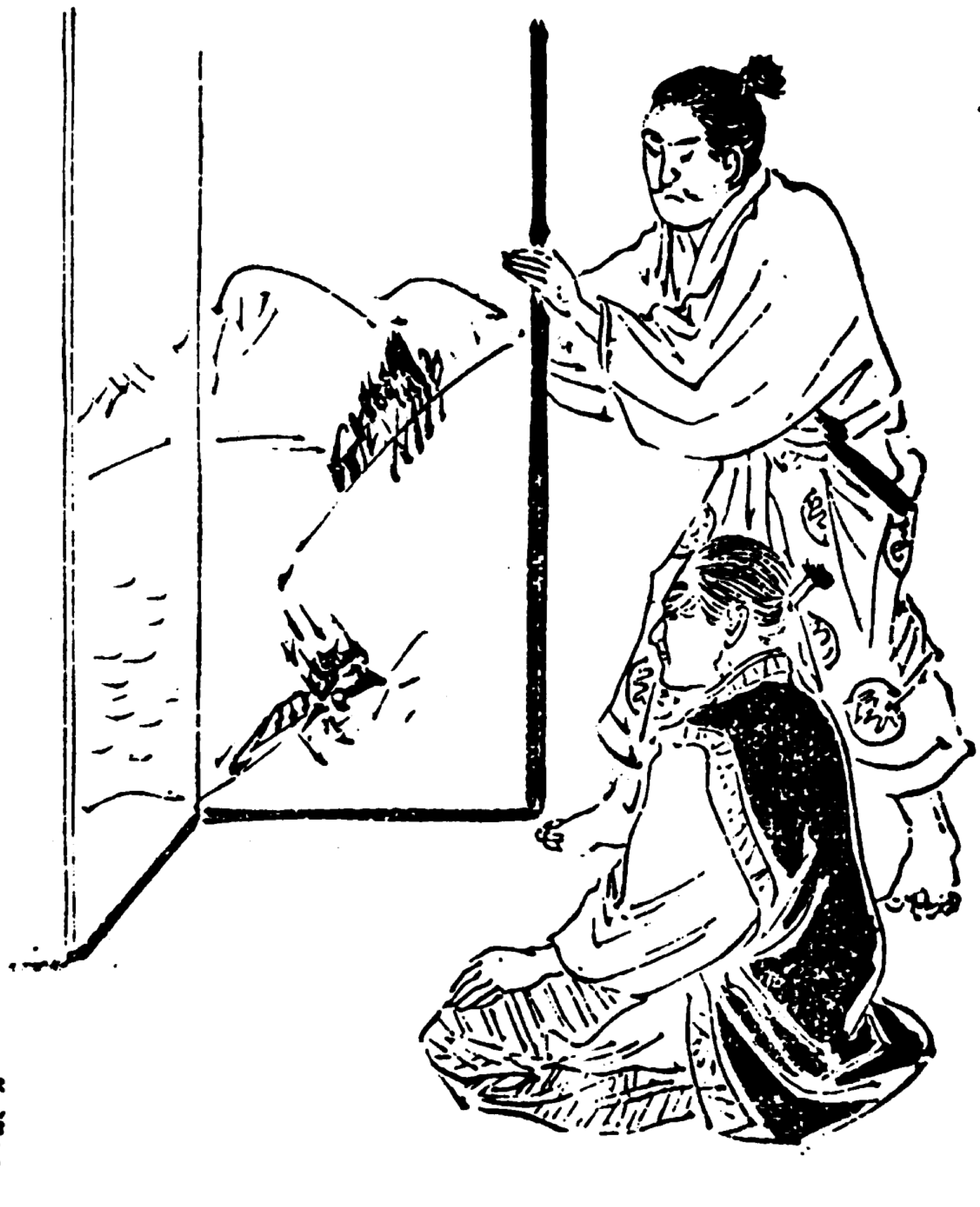
太田道灌、名は持資とて、資清と呼びける人の子にて、上杉持朝の臣なり。持資性いと穎悟にして、豪膽なりしが、時、足利の末つ方にあたりて、政令やうやく亂れ、諸國の豪族割據して虎狼の勢を恣にせんとするを見て、はやく大志を抱き、大に武を練へ、兵を學びて、また他を修めず、言行いと放縱なり。父之をあやぶみて幾度か教へんとすれど、持資きかず、あるとき父、持資にさとすやう、板垣は直ければ立ち、立つも曲れど倒る。人もまた細心、

言行、必ずつゝしむべき事なりとさとしたりしに、持資聞きもあへず、にはかに起つて一双の屏風を父が前に持ち來り、直ければ則ち倒れ、曲れば則ち立つ、之は如何にせば可ならんと云ひけるに、父唖然としてまた言葉なかりしとなり。

或時また、父、自ら驕者不久と云ふ四字を大書し、持資を呼び、其意を問ひしに、持資見るより筆とりて、同じく大に、不驕亦不久と書せるに、父あまりに堪へず大に怒りて、扇を以てうち擲きけるとなり。

小女の文才

道灌かゝる豪放の人なりしかど、あるとき雨に逢ひて、賤の屋に入り、簑笠を請ひけるとき、少女何言も云はず、たゞ山吹の花一枝をもち出でけるに、大に怒りて去りけるが、後、



七重八重花はさけども山吹の
　みの一つだになきぞ悲しき

の歌をとりて、實の(簑)一つだになき事を現はせるを悟り、大に耻ぢそれより武事のいとまに文學を志して、遂に文武兩道の士となれりけりとぞ。—

枝の山吹を以て、よく英雄を敎へたる少女が秀才、聞くもいとめでたき限りになん。

笑話

薫風仙史

「かゝみ」ぬし心地そこねたれば代りて筆をとりつ。

鼠の夫さだめ

大きなる倉あり。その中に年久しく何の不足もなくて住める鼠あり。女一人もてりしが、よきほどにのびやかにもなりぬれど、親鼠はかりけらく、よき婿もがなと思ひて、としごろ世の中に見わたせども、これぞと覺ゆるもなし。こなたよければ、かなたあしく、こゝ長たりと見れど、かしこみじかし。一人の女なれど、かけたる所なくて世にこよなきものを得て、あはせてん。つら〳〵思ふに、天なる日ぞこよなかるべき。これに合せなど一生の間憂もなかるべし、ありとあるもの何かは之にしかん。いでやいきて謀りなんとて、天にまゐのぼりて、その宮にいたりてその門守に申す。おのれいやしき鼠ながら年久しく大御いきほひを慕ひはべり、けふあながちに參ゐ上りて、まみえまつらんとす。よきに聞えあげ給へとて門にたちてまつ。門守入りてこのよしを聞えしかど、日の君よび入れてあへり。さて何のよしありてかまゐ來つるととへど、鼠答へて、女さゝげてんと思ふ意をいふ。日の君頭かたぶけていはく、さなり。ぬしがいはるゝが如く、天の下にありとある國いづれが我が光をあふがざらんされどもぬしが思ふごと恐らくはあたらじ。その故如何にとなれど、世に雲といふものあり。をりにふれては、わが前にたちかゝりわが光をさへぎる。これが爲には下つ國

そも照さず。いまはしと思へどもせんすべもなし、これ雲のわざにたちまさりたる故なり。今ぬしが爲にはからくは、この雲にしくものなからん。といふを聞きて、實にもと思ひて、まかり出てゝ、又雲のもとにいきておのがおもふ意をのぶ。雲きゝて、否とよ、おのれかぎりなき大空といへども時のまにもたちふたがりて、かきかくす力はもてれども、風といふいみじきものあり。これにあへど何處となくふきやられて、ありかも定めず。世に風ばかりつよういみじきはなからん。鼠きゝて又實にもと覺えけれど、子の爲には親も幼くなることわざにて、又風のありか尋ねて、いましむかりいみじきはあらじ、おのれ女一人持てるが、行先心にかゝりて安き心もなし。はしたなきものなれども、願ふらくぞ、召したまひて、おのれら親子の心をやすめしめ給へといへど、風したりがほにて、實にさなり。おのれ谷間よりおこりておもふがまゝに力をたくましくせば、萬朶の花もたちどころに散りしき、山もなりうごき、木は折れ伏し草はなびき、鳥獸もかげをかくし、限りなき大海原にすら荒波をもたゝよはしぬべし。さはいへどもこゝに一すぐれたるものあり。いかでかりゆかしくて入らまほしき所にても通はんと思ふ所ありとも、牆ありてはえ入らず。いかに心を苦むれども、これには得勝ずして立かへるなり。すぐれたるものこそおきてはあらじといふ。鼠又こゝを去りて、遂に牆のもとにいたりて、いかで女めし給へと請ひ且日の宮よりはじめて、雲風等がもとにてきゝたりし本末をものがたる。牆心ありげにうちかたぶきしが、やゝありていひけらく、まことに風ぬしがいはるゝにたがはず。おのれ關をすゑてふせぎ

守れど、かれは入りがたし。そこを思へどわれ風にはすぐれたり。されども、汝が儕つねにわが足もとに穴をうがちて、通路とし、あるは住所ともして、日を追ひて數多くうがちなど、われ何を以ちてかせきとゞめん。さて遂にはゐたゝで倒れはてつべし。こゝを以て又思へど、われ汝が儕には及かじ。といへど、鼠もはじめてわれにかへりて、遂におのが徒のもとに嫁かせきとなん。鼠なれどこそしかもありけめ。

須磨の月（八）

白魚女史

姫の手前さすがに安堵たる心地をよそほひて、啞僕のふるまひに憂をも忘れたるげなれど、雁のね、木の葉の落る音にさへ心をとゞろかす乳母は、早くも物音にわなゝぎ、思はず夫を見れど、牟禮兵衛も仰天の眼に妻を省、とく彼方へと指さす納屋の方、早くさとり、はやも涙ぐむ姫にとかくを云はさずあはてゝ納屋に引き行く間もあらず、どや／＼と面の方さわがしく、此處ぞ、此の家ぞ、牟禮兵衛とやらん、汝が住む人の、姫君をも伴なひまゐらしたるならん。殿の仰せなり、とく渡し奉れ、牟禮兵衛と大音に呼ぶは寄手のかしらと覺し。

牟禮兵衛も流石太刀とりし者のはてとて、心さわがず、何やらんめづらしき人音、何事ぞとて、ゆう／＼起ち出で、人々をうち守りて、こは御狩人に候か、鷹にても離れ入り候にや、さりとは知らず、小春の日和のあたゝかさに、思はずうまひ致し居りて、何も心付かざりしをろかさ、此處らうづらの床、遠く



も行き侍るまじ、いざ何處にても尋ね給へ、みなは入らせ給へ、向ひの森に、もずの巣も侍れど、御望とならば御案内もつかまつるべし。今日はひめもす此處を宿にかゝりくらし給へとて、松の戸さつと引きわけて何の奥底もなけなる様子に、寄手ども案に相違して、みな立ちすくむに、やは、牟禮兵衛、僞りぞ、姫君をば何處へはかくし參らしたる。御前の仰せ、早う出しまゐらせよと、つぶらなる眼ににらみつくるに、牟禮兵衛いぶかしきさまして、姫とは大領殿の姫君にや、勿體なし、其君が何と遊ばされし、爺が家にかくまひ候とは、さては御家におはさぬにや、我が女もつき奉りながら、けしからぬ、何と云ふ勿體なき事をさせ奉れる。そも如何なる由ありて、さやうなる事にはなりゆきしならん。此頃のいそがしさに、久しう行路のかれたれど、様子もきかざりし口惜しさや、さても心あたりは此處のみに候か、ればつかなや、何處に渡らせ給ふらんと、ますく\そしらぬ顔、大將もしばらく牟禮兵衛を守りたるが、否、牟禮兵衛、いつはるな、昨夜此道にさだかに逢ひたりとの人の告げ、かくして牟禮兵衛、太刀にかけてもゐて來れとの君命、出し奉らずば目にもの見するぞと、いきまきあらく弓弦さへならし見すれど、牟禮兵衛は少しもさわがず、靜におしなだめて、さなはやり給ひそ、如何なる仔細あるにや知らざれど、かくまふとならば廣くもあらぬ住家、何處ども見そなはせとおちつきたるさまに、流石の討手も、今は全く知らぬ事と思ひ、引きかへさんとして、なほなほ彼方此方尋ぬる足下に、むきてし柿の皮の一片おちありしを見て、牟禮兵衛如何にいつはるともあらはるゝは早き此證、如何で山奥のものが柿の皮むき

て食べん、正しく宮の中のものとは覺えたり。やは、者ども、あやしきは彼方とて、納屋の方に行かんとするに、おのれ狼藉、人の家にふみ入るさへたゞには置き難きを、まげにまげて下に出づれど、いよ／＼圖にのりての狼藉、主命なりの、姫を尋ぬるなりなどのたゞかりを以て、人の家の納屋におし入らんとする盗人、如何で只にやはおくべきとて、むかしはきたる太刀、なげしよりとり出しが、何の薪同然のやつばら、之もてくだきくれんと云ひざま、傍のまさかりおつとりて、うち向へど者ども進めど彼方も下知の下、百ぢかりの兵ども太刀ぬきかざして、おめき寄るに、己れはしたもの、犬死せんとにや、あはれのものと云ひざま、まさかりふり上げて、三人をうち倒しかへす手にまた三人、つゞけて左なる、右なる、めつた討に叩き散らすさわぎに、流石唖僕も之を見て、おりあふ鍬おつとり、主君と共に討つて出で、見るまに四人をつき倒し、なほ馬鹿力ふり立て、かけまはるあつぱれのふるまひ、寄手共大にひるみて、やゝ引色に見えけるを、引くな、寄せろ、強しとてたゞ一人二人、何のものかは、かゝれ、逃ぐるな、逃ぐるものは切つて捨てるぞとて、おめきさけぶ大將の聲に又一しきり。牟禮兵衛數ヶ所の重傷に力もつきぬるを、なほ一心、まさかり片手に、片手に大刀拔きてめつたに切りまはりぬるはりねずみの如き身に、又一つみけんにとびきたる矢だね、何かはえ堪へん、忽ち腦亂、眼くらみて倒るゝを、おどろき起さんとするは唖僕とさとり、僅にくりやの方指さし、くりやなる姫を早う助け出せまゐらせよとのゝしりて、早息絶えしに、唖僕は悲しみとりすがりたるまゝ、之も重傷によわりて、また起ざり

けり。折りしも何處よりか村雲一陣、にはかにわき立ちて、さつと一吹き、時雨まじりに、木の葉の地を叩く音急なり。

くりやより姫上をと呼はゝりし牟禮兵衛が最期の一語、寄手は早く聞きつけて、さては彼方なり、逃し奉るなと、皆どや／＼とくりやの方さして、とりまきぬるひまを伺ひ、乳母はそつとなやを忍び出で、生體なき沈みたる姫をおしたてゝ、裏の方より雨にまぎれ走りぬけたるを、寄手どもの知らざるぞおろかなる。

やがて程近き海邊、折しも一艘の岸邊につなぎあるに、姫をのせ奉り、おどろきあきるゝ一人の船子に、物も云はで、たゞ手を合せ、拜みて、己れは元にひきかへし、夫が屍にとりつき、妾がちぎりばかりに、かゝる非業の死、いまはまでなほ姫を守りての御心付、うれしとも、かたじけなしとも言の葉はたえて侍らじ、君が最期の智謀たゞ一つに、おぼつかなけれど、姫は、姫はとばかり泣く音切れず、せき上げ／＼生體もなかりけるが、せめては君が敵一人なりとも切つてはてんと云ひざま、夫が太刀おつとりて向ひたれど、早くも大勢にとりまかれ、あはれ、姥櫻またや風に吹き散りにけり。



曉紅葉　東久世通禧

有あけの月かけしろくおくしもに
みねの紅葉のいろやそふらん

菊をかさして　佐々木高行

駒なへてのへに手折れるしらきくを
かさしてかへるものゝふの友

山寺暮秋　鍋島直大

山てらの紅葉のかけにきてみれは
ふくかせ寒くあきそくれゆく

田上雁　前田利嗣

夕つくよほのかにてらすあし引の
やまたのくろにかりそ落くる

名所菊　長谷信篤

月かけののこるとみれど片岡の
あしたの原にさけるしらきく

月前雁　諏訪忠元

さやかにも月すめる夜は鳴わたる
かりの數さへよまれぬるかな

秋旅行　津輕承昭

わたりくる初かりのこゑ聞しより
更にこひしきふるさとのそら

岡紅葉　長谷信成

打なひく尾はなましろに秋ふけて
をかへの梢いろつきにけり

秋山路　宮地嚴夫

谷かはのひゝきをとめて立こめし
きりの中ゆくあきのやまみち

秋閑居　阪正臣

ひともとの紅葉みにくる人ならて
車のおともせぬいほりかな

河霧　鎌田正夫

をちこちに堤の尾はな見えそめて
朝きりはるゝかはつらのさと

鶉　師岡正胤

住すてしむかしの庵をけふ見れは
いまのあるじはうつらなり鳧

伊東ぬしの葡萄をおくられけれは　大畑弘國

ゑひ蔓はひまつはれてねし子らか
あかぬは君かめくみなりけり

寒松　三輪義方

さひしさの秋にまさりて松ひとき
殘るみやまのふゆのゆふくれ

内地雜居　下田義天類

直なるに習ふとはせであなかちに
ましるよもきのあさましの世や

湖上霧　三浦千春

もみち散る石山てらのあきかせに
うす霧なひくにほのうなつら

名所千鳥　仝

みち來らむ汐ときつけて月もいま
さし出の磯にちとりなくなり

荷田蒼生女　佐々豊水

家の風ひよ〳〵たかくいなりやま
杉がゑた葉にふきつたへけり

太宰春臺の母清水氏　仝

わきいつる清水のなかれきよらかに
子をみちひきしこゝろたかしも

里紅葉　草野隆道

小鹽山たかねはけふもしくれつゝ
もみちてるなりおはくさの里

守屋大連　仝

君まさは豐あしはらにかのきしの

にこれる水はなかれさりしを

歐州へ行く人をれくる　木庭芳香

こと國の酒はくむともかへりみて
いたくなゑひそ道まとふらん

殘菊　伊藤純三

長月になかくもにほふはなみんと
うゑしこゝろは菊やしるらん

深山紅葉　仝

さを鹿のおとさへたゑしれく山の
もみちも秋をふかめけるかな

かりかね　伊東祐賢

秋風によしみたるともかりかねの
たひ行くそらの道はたかへし

れのかうゑたる田のみのれるを見て　五十園徳文

わかうゑし門田のをしね色つきぬ
おこよ鎌とけいさ下り立ん

堪忍　菊地眞澄

思ふことといはてやみなんむら肝の
心ひとつにことはかりして

謠曲をよめるか中に小鍛冶を　足立正枝

きたひうつひとの心のにほひこそ
やかてかたなの光なりけれ

雁聲遠近　近衞貞子

一つらははるかになりし雁かねの
またほとちかくなく夕へかな

野逕霜　西四辻茂子

遠さとの小野のほそみち霜さゑて

ひとすち白くみゆる今朝かな

海上厂　柳原愛子

はりまかた秋かせさむき夕くれに
厂なきわたる須磨のうみつら

夜々聞雁　小池道子

宵のまは物にまきれしかりかねを
こよひもふけて後にこそきけ

雁横月　北島以登子

うす霧のかゝれる空に見えにけり
月をよこきるかりのひとつら

待菊　諏訪晴子

大君の千代のためしときくのはな
さくをまつまも久しかりけり

野雁　南郷柳子

霧こめしあきの野末を見わたせは
とわたるかりの行へしれすも

野亭擣衣　松平随子

更けわたる月にきぬたの音するは
のもりか庵のあたりなるらん

荒屋鶉　原田蒼生子

ゆか朽ちてこゝろのまゝに生しける
草のかれふにうつらなくなり

雨後紅葉　服部磯子

むら時雨はれゆく見れは松はかり
染のこしたるしははらのやま

菊花暁芳　小川直子

月たちてまた明やらぬねやの戸の
すきまの風に匂ふきくの香

折紅葉　安東菊子

都にはまためつらしきはつもみち

手折りてけふの山つとにせん

水邊菊　仝

菊の花したゆくみづはさそへとも
千年のかけはなかれさりけり

菊　海上壽子

霧霜のおくとはすれとさきにはふ
まかきの菊のかをりたかしも

千葉縣夷隅郡大多喜町なる町立大多喜圖書館の開館式場にてよみあけたる詞

五十園德文

いそのかみ古き御代はしらず。今の大御代はしも、ありとある外つ國々とあひむき立ちて、い交らふ御代にしあれど、萬の事業いよ〳〵しげかるまにまに、玉がきの內外の種々の書ども丶また大空の星の數なくなもあるなる。かくかぎりも知らぬ數多の文どもを、何の道くれの業とおのがむき〳〵もとめととのへんは、たやすきわざにあらず。されど志はありながらもたゞに空しくてやみぬるが多かるはあたらしく口惜しき限りなりける。さるをすぎし天賞堂のあるじ某もおなじ心にうれたみけむ、今のあるじその志をうけつがひて、黄金さはによせつるによりて、この文庫ぞまづかくは成れりける。おなじ心の人たちも遠き近きをいはず、これかれの書ども數多もよせおこせられつるに、なほ今よりゆくさき、おきつ藻のよる〳〵にとり集めなど又なき文庫ともなりなむかし。物學ぶ人たちも之に便りを得てその數もそはりぬべく、わざも亦すゝみぬべし。かくて遂に大君の御楯ともなり、皇國の柱礎ともなるべき人ども丶、こ丶のかげよりや出でたゝん。つらつら世のありさまを見るに、あるが中にもたゞ一鄕の

力もておこしたてたる文庫はこの文庫ぞまづおやなるべき。かくてあだし里々もこれにならひたらんには、天雲のむかふすかぎり、谷蟆のさわたるきはみ、このわざの至り到らぬくまなく、郷々も亦榮ゑつべく、里々の榮はやがて大御代の御榮になもありける。かくてわが大御國を世のおやぐにとあふがせ、わが大君をこよなき大君と仰ぎ奉らしめむもあにかたからめやは。けふのよき日の新室の賀の席にたちまじりて、かくほぎごとをのぶるは、この郷のかたはしにすめる御民礒野の德文なり。

明治卅年十月十七日

瀧の川にあそびてよめる歌並短歌

海上壽子

落たぎつ、瀧の川とふ、其川の、ながれにそひて、こゝたくの、松ぞ生たる、そこだくの、杉ぞ茂れる、松杉の、みどりにはゐて、こきうすき、木々の紅葉の、とりどりに、見のよろしもよ、霧霜の、秋の錦と、いにしへの、人も愛けむ、もみぢ葉の、匂へるかげは、あかずぞ有ける。

短歌

もみぢ葉の匂へるかげに思ふどち
にのはにゑみて酒みつぎせり

雜報



●みやぐさみ　かけまくはかしこかれども　兩陛下には、さいつころより御風氣におはしませりと承

り侍る。一日かたときもとく、御さわやき給はんをいのり奉る外はなくてなん。

●島津男爵の授爵披露　先頃華族に列し男爵を授けられたる島津久賢氏は、過日、近衛、岩倉、徳大寺、池田、島津、西郷、黒田、松方、樺山、高島、土方の諸氏を星岡茶寮に招待して、授爵披露の宴を開かれたりと。尚を同氏の授爵を祝ひて寄せたる和歌には、

近衛光子

れはみよのめくみのつゆのれきそめて
　さかゆるやとのすゑそひさしき

なきれやもよろこひまさんれはみよの
　ひかりそひぬるいへのさかねを

なからへしかひなきみにもときにあひて
　いへのさかねをきくそうれしき

税所篤子

こかくれししまやままつもあまつひの
　ひかりにあたるときはきにけり

れはみよのめくみのつゆにそみしより
　まつはかはらぬいろとなりけむ

●永代橋成る　隅田川の下流に架したるか、もとのはいと古ひたるを以て、こをかけかへんとて、去し明治廿七年六月といふに、はじめて工をれてし、五年の長日月を經てことし十月竣工し、本月十日盛なる開橋式を擧行せり。橋の長さは百間一合、幅員は七間八合なり。東京府技師倉田吉嗣氏の設計にして、搆造はトラス形なり。この費額は八萬三千六百五十八圓餘なりといふ。

●永代橋のかなちがひ　橋頭に鑄付たる「ゑいたゐとし」は「ねいたいとし」ならではかなはず。いか

なる筆のあやまりにかあらん。

●婦人義勇會　こたび、女醫松本愛子とじの首唱にて、大日本婦人義勇會といふを起せり。贊成者には、板垣伯爵夫人、星米國公使夫人を始め、鳥海女學校主鳥海秀子野中千代子外數名にして、京橋區南傳馬町三丁目八番地に本部を置き、婦女子に適切なる體育、姙婦及び産蓐中の心得等を教授し、傍ら婦女子をして、尙武的氣象を養成せしめ、一朝國家に事あるとき、外傷患者の急救所を開き、赤十字事業の補助をなす目的なりと云ふ。

●婦人共立育兒會　といふは、元と婦人の慈善心に訴へて、紙屑ランプの毀れ等を賣りたる金錢を受け、之を以て養育院の病兒を醫科大學に托し、療治を受けしむる組織なりし。さるを養育院は既に相應の資本を有して、殆んど獨立し得る姿となれど、育兒會は爾來東京市中貧民の病兒を扱ふ事となし、三千餘の會員を率ゐて着々歩を進め終に一大育兒病院を設立するの計畫なりといふ。さて淺草區の有力者數名は、先頃同所公園花屋敷を引受けて、菊花の觀覽を始め、元と營利一遍の業に非るを以て、此際一日の收入を擧げて、(動物食料雇人給共)右育兒會並に同會と舊縁ある養育院の二ヶ所へ寄附すべきよし申入れたれど、喜びで之を承諾し、花屋敷にては去し九日慈善會當日と定めて、施行せりといふ。

●町立女子大多喜實業補修學校　千葉縣夷隅郡大多喜町にあり。創立以來、もはら生徒の養成におこたりなかりしか、其の甲斐ありて、成績大によろしく、彌隆盛に赴くべきすがたなりといふ。さて又さきころ縣知事、師範學校長、縣視學等巡廻のをりも、くはしく狀況を視て、其の隆盛をよろこび、且生徒

の製作品數種をあがなひ、なほ織物等を注文せられしといふ。かゝる學校の本邦到るところに數多くなり、且いよ〳〵隆盛に赴かんは願はしき事なり。

●町立大多喜圖書館　これも千葉縣夷隅郡大多喜町にあり。さきに東京天賞堂主人故江澤金五郎の遺志を繼ぎ、郷黨の故を以て、建築費として金一千五百圓を寄付せり。ことし一月のころ土木を起し、煉化石を以ていと堅牢に建築し、去十月全く竣功せしを以て、その十七日開館式を擧行せり。來賓には縣知事及肝付海軍大佐等百餘名にて盛況なりし。なほ各地より圖書等を寄贈するもの多く、日未淺きに購求書とも數千部に上り、彌特志家の圖書寄付を募集すといふ本邦町立圖書館の嚆矢とすべし。

●貞婦秋山けい女　は資性温良、舅姑に事へて孝養忌らず、夫に貞操を盡すこと十年一日の如し。先に徳久同縣知事より、賞状並に金若干を下賜せられき。爾來其孝貞の譽れ益高しといふ。

三野郡本山村高木瀧治妻

秋山けい

常に舅姑に事へて孝を致し夫に對して貞操を盡す明治廿五年夫眼疾を患ひ蓐に就くや專ら藥餌を供し針灸を薦め只管治療の途を盡くせしも不幸遂に癒ゑず同廿九年に至り全く明を失せしのみならず又中風に罹り半身不隨となり家計益々窮乏に陷るけい此間に處し毫も屈撓せず幼兒を脊にして晝夜力役に服し其得る所を以て醫藥及日常の諸費を辨じ他人の補助に賴らず婦人の身を以て家數口の生計を支持し能く舅姑を慰め病夫を看護す其志行堅實克く久しきの艱難に耐へ更に渝ることなし洵に奇特の至りとす依て其賞として金五圓下賜す

●あたらよき子を　夜見路にやりつるくやしさは、親たらん身のみかは、こをきくもの誰かは袖をぬらさゞらん。小泉ゆき子といへるは甲斐の國都留郡七保村葛野なる小泉德平の三女にて今年十二歳なりしが、去し十月の末つかた、赤痢病にかゝりて、醫師の力も及びかねて、遂にはかなくなれりといふ。このゆき子性質怜悧にて、尋常小學校の四年生なりしが、もと八歳のころより學ぶともなくして、巧に和歌など詠み出て、義大夫節など親どもの習はするに、大人も及ばぬばかり上手にて、ことに學校にては、試驗のあるごとに、必學業優等の證を受けしといへり。さて病あつくなりて、父母兄妹を枕邊によびよせて、つくづくかほうちまもりしが、十八年になれる兄と、照世とて六歳になれる妹とに、わがなくなりし後にてもなかよくし給ひて、父母にもよくつかへ給ひてよなどいひて、

行くさきの道はしらねど是非もなし
　たゞあちこちとあそびゆかばや

と辭世の歌口ずさびて、やがて絶え入りぬとなり。記者もこの歌うちかへしかへしよみ味ふに、涙おのづから浮びて、眼も定かにはえ見ねど今は筆をおきつ。

●たやすき消毒の法　物品の容積に據るべしと雖も、石炭酸水にて洗滌し、沸湯にて掃拭するよりも、良く消毒し得て、且安心なるは、木綿の布片（巾一寸長一尺五寸以上位）を堅く卷き、針金にて尙之を緊束し、四十度内外の亞爾箇保兒を灌ぎ、火を點してピンセットの如きものにて挾み、汚穢の場所或は其の嫌疑ある局部を撫て廻せば、盡く黴菌を燒き殺し、凡て良く乾燥せしむる功力あり。且絹布にても紙片にても決して焚ゆる憂なくして、尤も簡易の消

毒法なりと。

●音聲と食物と　音聲のよしあしは、常の食物によることは人の能く知れる處なるが、今或る學者の說によれば、音聲の美なるものは、肉食を爲す者よりは、寧ろ菜食を爲すものに多しといひ、其例證として擧げて曰く、ネープルス、又はゼノア地方の利大利人は、魚肉を食すること多き爲め、美音の人甚だ少けれども、愛蘭などの田舍に到れば、菜蔬類を食すること多き爲め、女子の音聲は一般に美なり。諾威に美音の人少なくして瑞典に多きが如きは、畢竟、肉食と菜食との關係如何に由れり。又鳥類に就て觀るも、呀々として聲美はしく囀づるものは、穀物菜蔬を食するものに多く、肉食の鳥は、其聲概して荒々しきにあらずや云々とさもあるべし。

●精神病の鑑別　ドクトル、ウオード氏、此程ある公席にて演說して曰く、余は精神病患者なるや否やを指定すべき一確徵を發見せり、开は他にあらず、試みに患者をして、嚴正に且つ沈着に言語せしめよ。若其拇指が固定して靜止しあれば、決して精神病たることなきも、之れを震搖すれば、則ち該病者たるなり。蓋癲狂者は、書寫等に決して拇指を用ゆる事なし云々と。

●ビールと壽命との關係　ビールは、酒類中最も衞生に適する好飲料として用ひ來りしが、米國紐育保險會社顧問醫ドクトル、ロージャー氏は、ビール會社員及、其職工に就て多年其壽命上の研究をなせしが、其死亡比例は、壯年に於ては極めて少く、四十年前後に至れば普通人の死亡比例と同しく死亡數頓に增進し、以上六十歲に至れば、他の職業の人平均一人の死につき三人の死亡者を出す割合なり

と。尤も此ビール會社員は、平素一般に多量のビールを飲用したるに基因すと云ふ。

●番語の三つ四つ　一より十までの數を、イタ、ルサ、ナル、スバチヨ、リマ、イヌン、ペチヨ、アル、シブア、タブルといひ、手をリマ、口をアガリ、鼻をムジヨシ、耳をチヤリガ、目をマチヤ、眉をブケヾヽ、齒をアリシ、足をクラといひ、又猫をニヤオ、鼠をクヲバオ、米をバアツ、苗をウン、男をオカジヤイ、女をババヤンといふといへり。

●大蛇船中に卵を產む　去月廿九日、シンガポールより神戸港に入りたる、郵船會社の汽船廣島丸は、シンガポールより同港榮町西村某方に送附すべき、大蛇長二丈ばかりのものを、四尺四方の箱に入れて、搭載せしが、其前日の晝頃より夜に掛けて、翌朝に至るまでに、この大蛇は、百二三十個の卵を產みたり。其際大蛇は尾先三尺ばかりを左右に打ち掉り、如何にも苦痛の体にて、先づ一個を產落毎に尾を以て傍へに片寄せ、順々に卵を積累ぬるありさま、中々の奇觀なりしと云ふ。この卵は、鳥の卵の如く、白く且つ軟かにて、打碎けば其中にミルクに似たる物ありて赤き筋を張り居れりといふ。

●女子敎育要言　東京府高等女學校の講師三輪田眞佐子女史の筆になれる女子敎育一斑は、昨年來本誌紙上に連載し來りしが、既に前號にて完結せしを以て、此度、女子高等師範學校長秋月新太郎氏の校閲を經、名を改めて女子敎育要言と題し、美麗なる表裝を加へ、一冊子となして之を發行せり。庶幾くは、更に諸孃に便益する所あらん乎。

●女鑑十二月兼題

五日　歌……遠山雪　文……友人の非行を誡むる文　十一月廿五日〆切

廿日　歌……田家歳暮　文……爐邊閑話　十二月五日〆切



敎の庭

十一月廿日兼題　落葉滿庭

天　筑前國筑紫郡住吉村春吉五番町　林　久子

朽つるまではらはてを見ん紅葉はは
庭のにしきとけさはなりけり

地　肥後國熊本市白川新屋敷町堀榮一方　木川里子

ふみわけん方もなきまでちり敷きて
庭も木の葉にいろかへにけり

人　備中國倉敷郡三百十番邸　內藤小夜子

さなからににしきをしける心地して
はらふもをしきにはのもみち葉

秀逸（十五首）

はらはぬもなかなかよしや古への
衛士の手ふりのにはのもみち葉　住山幾子

ちりつもる庭のもみちはしばしだに
あきのなごりとかきもやられず　吉弘周子

いろ〳〵の落はのにしきしきつめて
ふまゝく惜しきにはのおもかな　金森とし子

おはかたの木々の落葉にうつもれて
我かいはなからふみそまとへる　田中ゑん子

木枯のさそふまに〳〵散りしきて
にははおちはにうつもれにけり　西　艶子

落ちつもるまゝに拂はぬもみち葉は
あれゆくにはのにしきなりけり　能登くめ子

やよ子ともあさきよめすな我か庵は
もみちのにしきしきつらねたり　尾田龝子

此のころはおりたつ隈もなきまでに
にはのおもてにもみち散りしく　大寺浪速子

もみちゞこすゑのものと思ひしを
いつわがにはにちりつもりけん　宮原貞代子

かきわけて訪ふ人もなししつかやの
にはは木の葉にうもれはてつゝ　名取正代子

拂へとも〳〵ちるもみち葉に
にはもまかきもにしきしてけり　諸井久良子

庭もせにしきしきぬとれもふまて
ちりてそつもれ木々のもみちは　屋摩高繁子

庭の面はれちはつもりてみちもなし
ふみわけてとふひとしなければ　白井とな子

とふ人もあらしのみふくやまがけの
にははれち葉にうつもれにけり　内藤妻子

(以下原稿到着順)

さらぬたに人も訪ひこぬわかやさの
にははれちはにうつまれにけり　西川順子

ちるまゝにくれなゐ深くなりにけり
ふみわけがぬろにはのもみち葉　柳原みち子

吹く風によそのもみち葉さそひきて
にしきあやなすにはのおもかな　淺井きよ子

ふく風にはらはらちれるもみち葉は
にはにもみてろにしきなりけり　穗積いれ子

庭の男もしばしばきをたゆたひぬ
あらしのあさのにはのおちはに　浦井豐子

はらへともはらへともな旺積りけり
あらしのすゑのにはのもみち葉　佐々小學子

かきよせて酒あたためんいざ子とも
にはもせにちる木々のもみち葉　佐々有鄰子

よもすからひがゝりしもみち葉は
あらしのにはにちりつもりけり　仁保苗子

ふみわけて鹿もとふへくなりにけり
はらはておきしにはのもみちは　田代豔子

よもすからふく風あれし庭見れは
木の葉は山をなしてけろかな　田代緞子

我かめてし庭のしらきくみぬぬまて
よへのあらしに木の葉ちりけり　美奈井芳子

ひまもなく散り敷く木々の落葉こそ
くれゆくあきのなごりなるらん　水上浪子

露しもにそめなすにしきうすくこく
おち葉ににほふにはのおもかな　杉浦よし子

けさよりは拂はてな見ん色々の
木の葉ちりしくやますみのには　萩園露香子

けるみれはくつぬく石もみぬぬまて
にははおち葉にうつもれにけり　永井さい子

なかなかに枝に見しよりまさりけり
つもりつもりしにはのもみちは　安井さめ子

風さそふおちはつもりてわがにはは
にしきのもともにしきなりけり　安井うめ子

たちいてんかたもなきまて我か庭は
もみちのにしきちりしきにけり　馭田しも子

よへのあらしけさはいかにと庭みれは
おちはのにしきあきみちにけり　富士村讃子

もみちはの木末さひしく散りふより
いつしかにはのみちもたねけり　徳永萬壽子

散りつもる木々の紅葉はにしきにて
ふまゝく惜しきにはのおもかな　田中恭子

けさ見れは苔のみさりもわかすして
にははおち葉にうつもれにけり　香川順子

流れ來るかけひのおさの絕ゆるまて
おち葉にうもるにはのおもかな　春永讃志子

わか宿の木々のもみち葉散りしきて
あゆむにたへぬにはのおもかな　政山ちゑ子

霜さゆるあらしのかせにさそはれて
にはにみちくるやまのもみち葉　萩原章子

ちりつもる庭のにしきなこゝろなく
吹きなちらしそ木からしのかせ　木村きく子

吹く風なまたてもろくも庭の面に
散れる木の葉はいくへなるらん　鷹野靜子

吹きつらむ夜中のあらしの程見ねて
もみち散りしく朝戶田のには　菊園千代子

宵の間のあらしのあさを今朝見れは
深くつもれる庭のもみちは　千代田榮子

小夜あらしちゝの紅葉をさそひきて
にしきおりしくにはのおもかな　綿野りき子

染め盡す木々のこの葉のちりしきて
にははもみちのにしきさそなる　田中美津子

うすくこく色つきにけるもみち葉の
落ちてつもれるにはのおもかな　武田玉子

昨日まてはらひ／＼しにはのおもに
みちさへたねて散る木の葉かな　長孝

吹く風におちはつもりて庭のおもは
にしき打ちしくこゝちこそすれ　弘田ゆき子

あさな／＼もみちのにしきおちそひて
ふまゝくをしきにはさなりけり　小野寺竹子

ふく風にもみちのにしきしきつめて
ふまゝくをしきにのおもかな　磯野たま子

夜あらしに木々のもみち葉ちりはてゝ
にしきさまかふにはのおもかな　磯野こさ子

日にそひて散りまさりつゝ庭の面に
ふみわけかたくつもるもみちは　榊原八千代子

昨日まてねたにありしなけさ見れは
おちはににはもうつもれにけり　酒井美佐子

我か宿のにはにおちたるもみちは
にしきしきたるこゝちこそすれ　生熊つれ子

今朝見れは庭はおちはにうつもれぬ
よはのあらしやいかにふきけん　山本靜江子

風すさみ木のはさわきしあさ見れは
いぶせきにはもにしきしてけり　田中ひろ子

けふしはもはゝきさる手もまよふ哉
はけばかつちるにはのもみちは　大矢せい子

吹く風にもみぢのにしき散りしきて
　夕日さひしきふるてらのには　赤沼香枝子

れさめして時雨さきゝしよあらしに
　けさはもみぢのつもるにはかな　江口さみの子

庭の面のあさきよめさへいさふかな
　もみぢのにしきたつこゝちして　松尾萓子

庭の面のしばふもいしもうつもれて
　いやかうへにもちるこの葉かな　今村額子

蜘のいにかゝるひさはをかたみにて
　おちはゝにはをうつみつるかな　小島岩子

嵐よりもかせのさそひてにはもせに
　おちはぞつもるやまもさのいほ　高橋きん子

吹く風ににしきさみねてちりしきし
　にはのこのはのいろもいろそふ　向井延子

つたひゆくにはの石さへわかぬまて
　いかにつもれるおちはなるらん　土肥仙子

おりたゝん道なきまてになりにけり
　にはにもみぢのつもり〳〵て　土岐米子

朝な〳〵はらふ我か家のにはなれさ
　けさはおちはにひまたにもなし　塚越芳子

ふりすさふ雨かさきゝて今朝見れは
　にはにみたるゝこのはなりけり　宇多田やう子

こからしにさそはれてちる紅葉はの
　にははいく重のにしきなるらん　中山さみ子

あれはてし庭ももみぢのちり滿ちて
　いまはにしきになりまさりけり　遠山よし江子

さよしくれ過きにしけさは散りしきて
　にははもみぢのにしきなりけり　遠山たけ子

ちり積るもみぢはあきのかたみなり
　くちはつるまてにはにながめん　遠山たゞ子

よもすからまさうつしくれ我か宿の
　にはにもみぢのにしきをそしく　遠山さゝ子

をしみつゝ拂はぬまゝにきのふけふ
　いくへつもれるにはのもみちは　竹村てい子

にはみれは芝生もたけもうつもれて
　いけのおもにもちる木の葉かな　羽田みれ子

はらはれはこすゑを風のふくたひに
　おちはかさなるにはのおもかな　河田いし子

ひさ葉ちりふた葉こほれて庭の面は
　いつしかにしきやまをなしけり　武藤いれ子

落葉してにはのかけひはうつもれぬ
　なかれのみつのおさのなきまて　武藤ふひ子

きのふけふ吹く木からしに庭の面は
　またももみぢのにしきしてけり　榊原みさを子

いつしかさ落つる木の葉に埋もれて
　ふみわけかたきにはのおもかな　玉井隆子

こからしの風のまに〳〵ちりしきて
　にしきにまかふにはのもみちは　二保志磨子

かきよせて木の芽をや煎ん庭もせに
ならのおちはのあめとふれれは　三浦鳩子

はら〳〵と風にまじりてもみち葉の
あはれにはにもにしきしきたり　大條和久利子

昨日こそわかめもねしさおもひしに
今日はおちはのにはにみちけり　楠花雄子

さきのころまかきの菊もみねぬまて
にははおちはにうつもれにけり　岡田陽子

夜あらしの吹きしあしたは賤かやの
いほももみちのにしきしきけり　廣田さめ子

草のやのかきれのもみちにはもせに
ちりてにしきなしくかさそおもふ　武田榮子

にはもせになく虫の音もうもれけり
夜半のあらしに散りしもみちに　水上浪子

こゝかしこ鳴く虫の音もうもるまで
わかにはもせにちるもみちかな　潮井登代子

あせぬまにさふ人もかなわかにはは
なべてもみちのにしきしきたり　稲原菫子

きのふけふ吹きすさみたるあき風に
しづかにはにそおちはみちける　西ふみ子

吹きわたるあらしに紅葉ちりはてゝ
にしきをしけるにはのおもかな　眞島千鶴子

庭のもはもみちのにしきしきつめて
ふまゝくをしきこゝちこそすれ　眞島照子

さかしきは風の枕ねたるゆふくれに
木のはこほるゝよもきふのには　笹山みち子

よもすから木の葉さそひしやま風は
にはのかよひちうつもれにけり　楠精子

わかやとのにはのもみちはふく風に
散りくうもるゝゆふくれのそら　町田鶴子

風ふけはこけをころもになすいはも
もみちのにしきたちかされけり　大森純子

しもるねて人めかれにしわかにはに
ゆふつきさむくちる木の葉かな　島田好子

垣ひさへさなりのかしはちりしより
わかやのにはもうつもれにけり　木村淑子

もみちはのこほるゝさまそ面白き
にはにつもりてやまをなしつゝ　小川金子

ゆふしもやふかくおくらんやま風の
ふかせてつもるにはのもみちは　小川富子

かせはやみ時雨はよそにすきぬれと
のこりてにはにつもるもみちは　神田靜子

散れははき掃けはまたちる紅葉はに
わかにはの面はうつもれにけり　吉川國子

おさなふは誰そさおきてしはの戸を
あくれは落つるにはのもみちは　高橋信子

わかやとの庭のもみちはふくかせに
みちさへわかすおちつもりけり　濱口直子

わかやさの軒はのもみち散り志きて
いけのなかれも音かれにけり　秋園菊子

庭の面につもる木の葉なかたよせて
またふきつもるにはのおもかな　吉川佳子

こからしの誘ふまに〳〵散りしきて
にははおちはにうつもれにけり　小野田のぶ子

さはかりは木深くもあらぬ庭なから
ちりてつもれるおちはありけり　秋園露子

やまおらし吹きなちらしそわか庭の
に志きあやなしつもるもみちは　岡澤千鶴子

枯れはてしこのはもわれに勝るなり
ちりぬるにはにに志きなすさは　吉田かれ子

わか庭にたか織りかけしにしきそさ
ふむもなか〳〵おもしろきかな　宮原幾子

くれなゐのにしきやしくさまかきまて
にはもせにちる木々のもみちは　堀西光子

したくさもうつもれはてゝ庭の面に
ちりつもりたる木々のもみち葉　坂田きみ子

木々の葉のちりそめてより昨日今日
庭のこけ路は見ゑすなりけり　多津與子

わか庭はおつる木の葉にうつもれて
見るかけもなく荒れはてにけり　佐奈美子

やまかせに木すゑの紅葉散りしきて
見るめもあやになれるにはかな　晋妻ちか子

ふき送るかせにまかせてもみちはの
我かにはにしもつもりぬるかな　紺脇ます子

ちりしきて積るもみちのにはの面は
あやにしきさも見ゆはかりなり　池谷宮子

雨さのみ夜半にはきけさ今朝みれは
庭は落葉にうつもれてけり　押田里子

庭もせにこすゑの紅葉ちりしきて
にしきのさこさなりにけるかな　木村みつ子

しけりあひし梢もいつかひきみねて
はらへさたまるにはのもみちは　濱田直子

かきよせてたくもあたらし庭もせに
おちつもりたる木々のもみちは　隆田槇子

こからしの渡りしのちの我かにはは
木々のおちはにうつもれにけり　石川助子

かき拂ふこさのなしさに日をふれは
おちはのにはさなりにけるかな　戸塚てつ子

ちりしきしもみちの庭はそのまゝに
朝清めきへせてすこしつる哉　中桐きやう子

かせふけは空にしられぬ志ぐれして
にははもみちのちりそつもれる　服部かつみ子

けさみれはちりしもみちにわか庭は
ふまんかたなくうつもれにけり　日吉あさ子

もみちちる庭のまさこちにしきして
ふまゝくなしきなかめなりけり　細川ますみ子

人さははいつこふまんさまさふまて
にはにもみちのにしきしきけり　小澤みん子

夢さ見しそのよあらしはふかれさも
もろくもつゝむにはのもみちは　藤島英子

時雨かさ聞きまさひしをけさ見れは
にはは木の葉にうつもれにけり　川部孝子

紅葉せし木々の木の葉もちりはてゝ
ふみわけかたきにはのおもか　吉田三千代子

さよしぐれふるさ聞きしは嵐にて
にはにはおちばのふちさなりけり　小林藤子

あきなく〳〵のきのもみちの散りしきて
にしきにまかふにはのおもかな　岡澤りん子

わが宿のにはの木の葉のちりはてゝ
けさはにしきをしきにけるかな　佐藤さき子

いつの間におちはは庭をうつめけむ
ふまゝくをしき今朝のいろかな　長嶋英子

いつの間に落葉のものさなりにけは
わかしめゆひしませかきのうち　畠山香代子

かきつめてたく人もなき庭のおもに
なさておちはのふりつもるらむ　片山きみ子

我か宿のにはは木のはにみちもなし
ふみわけて問ふひさしなけれは　日高かす子

落ちつもる庭のもみちはうらみれば
くれゆくあきもさまるなりけり　輕部壽子

冬されは木々のおちはのちりつもり
にはのおもさへ見ゑすなりけり　森田綠子

庭のおもは木々のもみちのふりつみて
にしきをしけるこゝちこそすれ　石川類子

くれなゐのこけや生ふるさ思ふまて
にはにふりつむ木々のもみちは　石川樂子

さよあらし吹のおちばをさそひきて
今朝もそのふのみちうつみけり　松岡濱子

にしきなす紅葉も今朝は散りしきて
わか住むにはにみちにけるかな　杉山孝子

紅葉ばはよはのあらしにちりしきて
ふまゝくをしきにはのおもかな　伊東美代子

やまさとの庭はおちばにうつもれて
さひこむひさのあさもたねぬる　内藤千代子

朝きよめする手もしはしためらひて
にはにふりつむもみちをそ見る　内藤まよ子

こゝろ〳〵みさりの苔のあやなして
もみちのにしきしけるにはかな　内藤貞子

さらぬたにひろくもあらぬ庭の面を
今朝は木の葉のふりうつみけり　内藤あや子

ふく風に木々のおち葉のちりつみて
こけちもわかぬにはのたもかな　宮地こさ子

木からしに紅葉のこらすちりはてゝ
ふまんかたなきにはのおもかな　石崎さく子

ちりしきし君かみそののもみちはを　むしろになして一夜ねなまし　白石まき子

ちりしきし君かみそののもみちはは　ふまゝまくをしきにしきなりけり　白石梅子

こくうすく大和にしきをしきにけり　くもゐのにはにちれるもみちは　栗林ふみ子

吹く風に木々のもみちは散りしきて　しつかにはさへにしきなりけり　三村醇子

名殘なくちりしくにはのたちはにも　あきのあはれのふかさをそしる　大久保みち子

こからしのふくに任せてもみちはの　にしきをしけるにはのおもかな　田邊はる子

おのつからにしきの庭になりぬなり　きゞのおちはのつもりつもりて　田邊きやう子

ちらすへき風はふかれさにはの面は　木々のおちはにうもれはてけり　田邊みつ子

木からしの風のきそひていろ／＼の　このはちりしくにはのおもかな　泉さい子

ちりしきて庭にみちつる木の葉こそ　さなからにしき織りいたしけれ　右田藤子

くれなゐの木の葉ちりしく庭の面は　またしさしほのにしきなりけり　野中あさ子

くれなゐのむち庭に葉はうつもれて　こけのみさりもいろなかりけり　下元もさ子

ふゆのひに庭のこけちをうつむるは　あきをかたみのもみちなりけり　上野君子

ふく風にのきのこのはのちりしきて　さころせきまてなれるにはかな　近藤よし子

庭もせにみさりのこけにちりしきて　くれなゐそはろ木々のもみちは　宇高松子

十一月廿日兼題　新嘗祭

天　和泉國泉北郡深井村　稲原董子

けふは、今年の新穀を、天皇陛下親ら、皇太神宮にすゝめさせ給ひ、また御親らもきこしめし給ふ、いともめでたき、御祭りの日になんある、然れどこそ四方の民草、いづれも、軒端／＼に、日の御旗かゝげ、ひたぶるにことほき奉るなれ。

そも、日々の常食として、玉の緒をつなぐる嘉穀の種は、初め　皇太神の宮の、播かせ給ひしところにて、天孫のあまくだらせ給ふ時にも、齋庭の穂を授け給ひ、民を養はしめ給ひしとかや、御惠みの深さ、中々に仰くも畏こし、されは、世々の帝の、年々かく、おごそかの禮以て、天祖諸神に事ふまつらせ給ふは、ひたぶる、天祖起原の御心に、報いさせ給ひ、

民草のいよゝ安かれど、祈らせ給ふ、伊勢の海より、いや深き大御心なれは、つかのまも忘れで、報いたてまつらてやはと、賤のをだまきくりかへし、ことほき奉るになん。あなかしこ。

地　甲府市山田町　名取正代子

けふはことしの新稲皆熟したるを以て、我　皇帝陛下の、御親ら皇祖大神にすゝめさせたまひ、又御身みづからもなめさせ給ふ、めでたき御祭日なり。つゝしみておもひ見るに、人の生命をつなぐべき此穀物の其種は、もと皇祖大神の植ゑさせ給ひし所にして、我々遠つ祖、即ち國民の、常の食と定むべしと授けさせ給ひしなり。されど、國民これよりみことを重んじ、此業をつとめて、年毎にゆたけき秋のみのりをいのりつゝ、圖らざる凶年にも、飢餓の患なからしむるもの、皆これ皇祖大神の賜ものなり。我等國民、この有難き神恩を忘れず、ます〳〵此業をつとめはげみて、皇恩の萬分の一にも報い奉らんことを希ふなり。あなかしこや。

人　岡山市八番町八番地　降田槙子

千町の小田にうちなびく、足穂の稲を、大みけに、つくりて、皇太神宮にすゝめ給ひ、大君大みゝづからも、きこしめさせ給ふ、今日の御祭こそ、いともたふとけれ。そも我國は、みづほの國とて、稲をもて、青人草の命の種とするなれど、世々の帝、民草の爲にとて、ことに大御心を用ゐさせ給ひ、年々の二月には、祈年祭を行ひて、みのり豊かならんことを、祈らせ給ひ、十一月に至りて、新嘗の御祭をぞ、擧げさせたまふなり。此祭は、古よりいと重んぜさせ給ひし、大典にて、ひとへに、千はやふる神代の、様を用ゐ給ふとかや、新嘗の御祭としも、名つけて行はせ給ひしは、遠く　用明の帝の、御時より始まり、新なるみかどの御位に、のぼり給ひし年には、大嘗會とて、ことに盛んにいとなみ給ふと、承るなん、いともかしこきや。

（以下原稿到着順）

西つや子

木枯なから今日はいさ長閑に、枝吹きならす音もなく、朝霜のてる日に遇ひて解け行くは、さなから春のかけろふの如く。おもむろに吹き靡く日の御旗は、家々の軒に輝き渡り、早稲田は早くそか収獲を終へて、見る目わひしき賤か伏家までも、新米の俵積み重れ、な

ほかり殘れるは皆美しく色付きて、穗房重げに、今年のみのり知らせがほなるも、いと目出度し。そも今日なむ、畏きわたりへ初めて新米を進め奉り、なほもろ〳〵の神々へ、初穗をさゝげ奉る日なるとかや、されば世の民草も、おのがしゝ其なりはひを休みて、豊けき年の目出度さを、喜ひかしこみ祝ふなり、されば物わひしらに、打すくみてのみ有らんもいと畏し、いざとて程近き、縣の社にまうでぬ。みしめ引く籬の緣のうるはしきに、むら雀聲よろこはしう、鳴きかはしたるも、いと愛つらしう、あかぬ心地して、打ながむる程、みとひらの開く音して、柏手の聲さやかにも聞えければ、いそぎ、み前にかしこみて伏拜みぬ、宮司の人、烏帽子ひたゝれ、優にうち裝束きたるが、御酒初穗など、供へ奉るさまの、いと畏う雅やかなるに、いつしか遠く俗事に、かけはなれたる心地して、暫し打まもりつ、其よりみ垣の元にちり殘れる、紅葉をながめなどしてかへりぬ、實にかくゆたかに樂しう、打暮らさるゝも、治る御代の大御惠、かぎりなき父母の御惠なりや。

神谷せい子

それ十一月廿三日と云ふ日は、如何なる目出たき日なるや、恐しくも日の本の大君に妾がはらからの朝な夕なにはげみ樂しくさゝげまつらはやとつくしゝ心もいよ〳〵この日とはなりける。粒々辛苦てふこともなにかあらん、大君の爲め、妾がはらからは唯唯眞心もて雨風のいとひなく、其のしるしは如何ならんと、其の力を休むる時も忘るゝいとまなく、つひに丹誠のかひは稻の穗にぞ見ゆける、嗚呼樂し長閑なるこの日、千代田に遊ふ嬉し嬉し妾がはらからと共にうちつどひて、偏に　大君の御勢きの幾千代も榮ゆまつらんことを祝ひまつるになん。

弘田ゆき子

掛けまくも畏かりけり、十一月廿三日は、新嘗の御節會にて、九重の雲の上にては、今年の新穀を、皇神たちの大前に捧げ給ふ御ためしにて、かしこくも皇御孫の尊の御手づからささげ奉り給ふとぞ承り侍る。抑々此の御祭は、神代のむかし、　天照大御神、瓊々杵の尊に授けさせ給ひし齋庭の穗を種として、豊葦原の瑞穗の國に幾萬代を傳へし奥津御年を、今年の二月に祈年して、豊かにみのれる新稻を、御酒御飯に造り、又足穗の稻のままをも、御年の神たちに捧げ奉り、かへりまをしの御祭し給ふとかや、こはいそのかみふりし昔從、千早振神代ながらの御よさしのままの事にて、いともいとも畏き御祭り日にこそはありけれ。

千早振神も嬉しくおほすらむとよ年しるきけふの新なめ

江口さみの子

家毎に天つ日の旗かゝげ、いとにぎはしう祝ひまつる今日は、あやにかしこき　大君の、神風の伊勢の大神に、新稻の初穗を參らし祭らせ給ふ祝の日にて、新高山の山かげより、千島のはてまで、とこしなへに大御世のめぐみをいたゞき、やすらに樂しうすごすも、高く貴き御惠みのたとしへなきにこそ。

高橋きん子

掛卷も畏く、言卷もかしこき、新嘗祭はもよ、我が皇孫尊の、遠つ御祖の、神代より、はふ葛のいや遠長く、玉葛たゆる事なく〳〵、萬の祭は澤なる中に、いと尊く、やんごとなき御祭なり、そは　皇尊の天の下、あを人草を深くめぐませたまふ、御のりにして、人の命を

佛つに、一日も欠くべからざる稲の新穂のたなつ物を、御自ら供へまつり、天つ神地つ神を祭る、大御祭にして、此の日は、百の司に酒肴を給ふ、萬の外つ邦には、たぐひて、あることなし、先づ年、亞米利加の「グランド」氏、打つ日さす都に來りし折に、新嘗祭の時にあひ、親しく仰ぎまつりて、綾に畏み、世にたぐひなき、御祭と、いひほめたりとなん、かく類なき、うまし國に生れたる人こそ、いと幸なれ。いそのかみ、古き昔より、都の人は、皆業を休みて、愼み、いつき祭りけるときく、明けき御代の惠に、うつ蟬の今は、天放るひなさいへども、門ごとに、目かゞやく日の丸の旗を立てゝ、いはひまつるにいたれり、あなかしこきかも、あなたふときかも。

宇多田楊子

我日の本は、瑞穗の國とよべることさく、貴賤上下の別ちなく、みな瑞穗の稲の實らずては、一日も生活しうべき道なければ、畏くも我大君は、一ツに御心をこゝによせらせられ、先に年の豐熟を祈らせ玉ひし驗しありて、國何處となく千町の小田は、美稲うちなびきぬ、そをかりほして御饌につくり、來る新嘗祭、あな尊しや、祝ふあしたの朝日の影は、軒に連なる國の御旗と共に輝やき、厚きめぐみの露にうるほひ、人皆の心のうれしさも、余りて鄙も都も賑ふ今日こそ、げにめでたけれ。

廣田さめ子

世には、日常の食物の乏しき國こそ、おほかめれ、其甚だしきは、人の肉をへ喰ふとぞ、あな恐ろしや、あないまじくしや、我國は、世に雙びなき國にて、遠き神代の昔より、萬とゝのひ、五穀よく稔ければみつ穂の國と、なも貢せける、又代々の 天皇の、御惠深きは、たとふるに物なし、されば、年々新嘗祭の式を行はせられ、今日なん九重にて、稲の初穗を、皇大神等にそなへ、新年祭のかへりまをしなせさせ給ふなる、いと尊く、かしこくこそ、かゝる目出度き國に、生れ出でたる人、たれか喜ばざらんや、山に住む木こり、もしほたくあまの子まで、此の命つぐ尊き米を喰ひ、樂しく日を送るは、皆大神等の、御惠の深きに、よらざるはなし、然あれは、 天皇のしろしめす、此國の民草、今日の尊き日を、うやまひことほきまつらでやは。

眞島千鶴子

この日は、古へにも行はせられし大嘗祭のれいにならひ、こ年熟したる新穀を、皇祖太神宮を始め、諸の神々にも供せられ、天皇陛下自らも嘗めさせ給ふ御祭日なり、つゝしみておもふに、かく新穀を供へ、天祖の神々を祭らせ給ふ御主意は、天祖太神宮の、親しく此國を治め給ひ、民をあはれみ生をつなぎ、寒さを凌ぐの御教をたれさせ、吾々生活の本を授け給ひたる御徳をしたはせられ、猶も大御代のゆたかにやすらかならむことを祈らせ給ふ大御心にましますなり。さればこれ〴〵臣民たるもの、それ〴〵定まれる家業をつとめはげみて、かしこき大御心にむくい奉り、とこしなへにゆるぎなからんことをつゝしみて祝ひ奉るべき日になむありける。

宮原貞代子

あな尊しや、今日は、目出たき新嘗祭にして、千町の小田に、打ちなびきたる、八束穗をば、御饌につくりまつりて、我大君の御前に供へ奉らんとは。

あはれ、千代田城頭、炊烟賑やかにして、あたり、彩雲こまやかなり。二月の祈年祭、今日こゝに驗ありてや、このありがたきかしこき、

大御代におひまつれるうれしさ、門毎の國旗は、ひらひらとして、太平を祝し、新嘗祭の唱歌は、この、豊けき祭を賀し來る。尊しや、ありがたや、君のめぐみ、雨の如く、民さかゆ、草の如けん。

うまし稲みけにつくりてたてまつる　今日のまつりのたふさくもあるか、

林 久子

けふは新なめの御祭なれはにやあらん、霧のいろさへ、のどやかにはれわたりて、ちりなうこがすかせたにもなし。かけまくもかしこきわか大君の、ことしの秋の初穂を、御祝の神にさゝげ給ひて、天が下のたみ安かれといのりますらん。されば大御祭の露は、さし月に民草にかゝりて、ゆたかに樂しきよろこびの色は、新たにかゝげつゝ、日の丸のはたてにもあらはれわたりてなん。

白井さな子

新嘗祭とは、禁中にて、年々の初穂をもて、御祖の神に奉らせ給ふ御祭なり、この事は、已に神代の頃より起りて、國家に大事の祭なり、そも我國は、昔より、先祖崇拜の國柄にして、かしこくも、我皇統連綿として、萬世不易なる所以は、實は、聖上の御祖を尊び給ひて、祭を絶ち給はぬによるなめり。此に、臣民たるもの、誰か聖意を體しまつらん、實に、忠孝の起る所も亦此に基す、今上聖明、歴代比なき今日に於て、いよいよ御祖の神を崇び給ひて、年々祭をおこたり給はず、今又此に、新嘗祭をむかふるにあたり、臣民たるもの、つゝしみて、意を表しまつるべきにこそ。

岡澤りん子

秋の田になびきし垂穂の稲も、見渡すかぎり刈り入れて、ひつち田に、再び穗も出なん頃となりぬ、今日十一月二十三日ば。畏くもかしこくも、大君の、今年のうまし稲を御饌につくりて、御祖たちに奉り給ふ御日と承りはべるに、年々更衣の頃、民の安けく年の豊ならんやうにと、すべらきの自ら祈り給ふことと、いとも忝くて、袖さへ涙にくちぬる事になん、されば年々の御祈りに、かくもめでたく安らけき大御代に逢ひ、豊なる年のみ打つゞくならん、今日新嘗の御祭りにあたり、わきて妾等のうれしく思ひ侍るまゝかくなん。

佐々有郷子

今日の生日は官幣社國幣社をはじめ天神地祇八百萬神社に新嘗たてまたしたまはんと今年の新田ちからを横山なす置たらはして天皇のゆしりいづしりたまふ大御祭に侍れば賤が山家は旭の御旗押し立てあまがさまやは新しぼりさゝげまつりて父母にも親族にも直會のむしろひらきてうたひかなづる神事なればさながら上津御代に立かへりしむちせられていと神々しうなん。

泉きい子

新嘗のみまつりは、いにしへあまてらす、大神より始りて、幾千代をへし後のけふまでも、傳へかしこみて、つかへまつるなり、さるは年毎きさらき月のなかばに、天神地祇に、とよとしをいのり、さて神々の大恵によりて、みのれば霜月のなかはにはちまちの小田に、うちなびく、たり穂の、ほさきゝりきよめて、御酒につくりて此日神に奉り大内にて神にさゝげて、祝ひたまふさがや、下さまにもところどころの御社に、おのおのさゝげまつり、けふのよき日をことほきて、まつるなり、いともかしこきすめらみくにのめでたきためしになん。

大日本女學會

會員募集廣告

總裁小松宮妃殿下副總裁鍋島侯爵夫人

●本會贊成員は有栖川宮大妃殿下華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方八十八名

趣旨

本會の趣旨は女子敎育の普及發達を圖らむがため女學の講義錄を發行し入學すへき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信敎授を受けしむるに在り其講義は極めて平易親到を旨とし實踐の用に應し輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せしむ事を期す●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれは今や新に學科を增設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に

會員を募集す

志ある淑女達とく入會あれかし●本會講義錄は女學講義と稱し畏くも 皇后陛下御覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一冊の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にて每月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月參拾錢束修參拾錢●會則希望者は郵券料を添へて申込みあれ

學科及講師

●修身(女子修身談)細川華族女學校長が從來同校に於て演說せられたる者に係る(禮法)佐方女子高等師範學校敎諭●國語(國文)關根學習院敎授(作歌)大口御歌所錄事(作文文法)今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校敎授●歷史(日本歷史中萬國歷史)大森文學士●地理(日本地理萬國地理)富田文學士(地文)脇水理學士●理科(物理化學)近藤工學士(博物)石川理學博士(生理衛生)未定●家事(家庭敎育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校敎諭(家事衛生)三宅醫學博士(小兒衛生)三島醫學士●割烹、御園華族女學校敎員●小兒心理學、下田文學士●裁縫、渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校敎授●音樂、未定●手藝、活花點茶)田邊東京女學館講師

附錄

●史談、下田華族女學校學監●小說、逍遙學海紅葉三大家●お伽譚、漣山人●詞藻●質問應答●雜錄●雜報

來る廿五日初卷發行

東京市麴町區土手三番町二十八番地 大日本女學會

三輪田眞佐子著

女子教育要言

十一月十五日發行

●定價金三拾貳錢
●郵税金六錢
●郵券代用一割增
但一錢切手に限る

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化育の良績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せざるなり女史曩に女史の本分を著はして我國婦女子たるべきもの丶標準を示し女子處世論を著はして女子の身を處するの方法を述べられ本社之を世に公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ其の如何に世に重せらる丶かを知るべきなり女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡すに足る資格を養ひ如何にして其身を處するに足る技倆を練らんかを述べらる蓋し世間女子教育の論尠からすと雖多く教育者の注意を促すを目的とするものなれは此等は廣く讀者を益せざるを憾とす本書は教育の方法に止まらず婦女各自の訓戒となるべき義理を撰び叮嚀親切に説き諭されたるを以て獨り教育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懷く婦人と雖針をもてる少女と雖苟も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべからざるの良書なり今左に其目次を掲ぐ其の詳細は本書に就きて之を見るべし

女子教育要言目録

○第一章　緒言
○第二章　女子教育の大本　●女子教育の意義●一切の能力●實學●國情と教育●國体と一致●教育と風土●富の程度と教育●教育と宗教●道德の主義●女子の天職
○第三章　女子の德育　●天然と女子●女德の必要●女子德育の淵源●儒教と女子●時勢と教育●女德涵養の方針●女德の要目●德育の方法●人物の養成●學風●感化●校風●師道●寄宿舍●修德の工夫●女傑崇敬●概要
○第四章　女子の智育　●女子智育の目的●疑問●智識の價値●智識の撰擇●智育と婚期●必要なる智識●人類としての智識●國民としての智識●自衞の智識●家政の智識●妻たる智識●母たる智識●學識●智育の素因
○第五章　女子の体育　●女子体育の理由●体育の手段●擧止を注意すべし●習慣を改むべし●衣服●身裝●運動●飲食●境遇●婚姻●休養
○第六章　女子の美育　●美●美育●天地の秘義を悟るべし●和合の思想を養ふべし●色彩の辨識につきて●配合の意匠につきて●態度●純潔●附言
○第七章　女子高等教育　●女子教育上の關係●人類の天性を全らせんため●國家の文化に伴ふため●男子との權衡を有つため●上達の道を開くため●高等教育の範圍●適當なる學科●注意
○第八章　女子の學制　●學校教育●倫理●讀書●數學●作文●裁縫●家政●本邦歷史●其他の學科●女子特別教育
○第九章　終結

東京京橋區築地
二丁目廿一番地
發行所　國光社

三輪田眞佐子著

女子の本分

第七版

定價金廿五錢
郵税金六錢

東洋の君子國秀麗端正なる女教自然に存する之を涵養し之を發揮し以て貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめんこと是れ『女子の本分』の主張する所なり今や江湖の望に應じて第七版の成るを告ぐ苟くも女子教育に志あるものゝ座右一日も缺くべからざる良書たるは世の許す所也

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話本局八十八番）國光社

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及遞運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず會員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十年十一月十九日印刷
同年十一月二十日發行

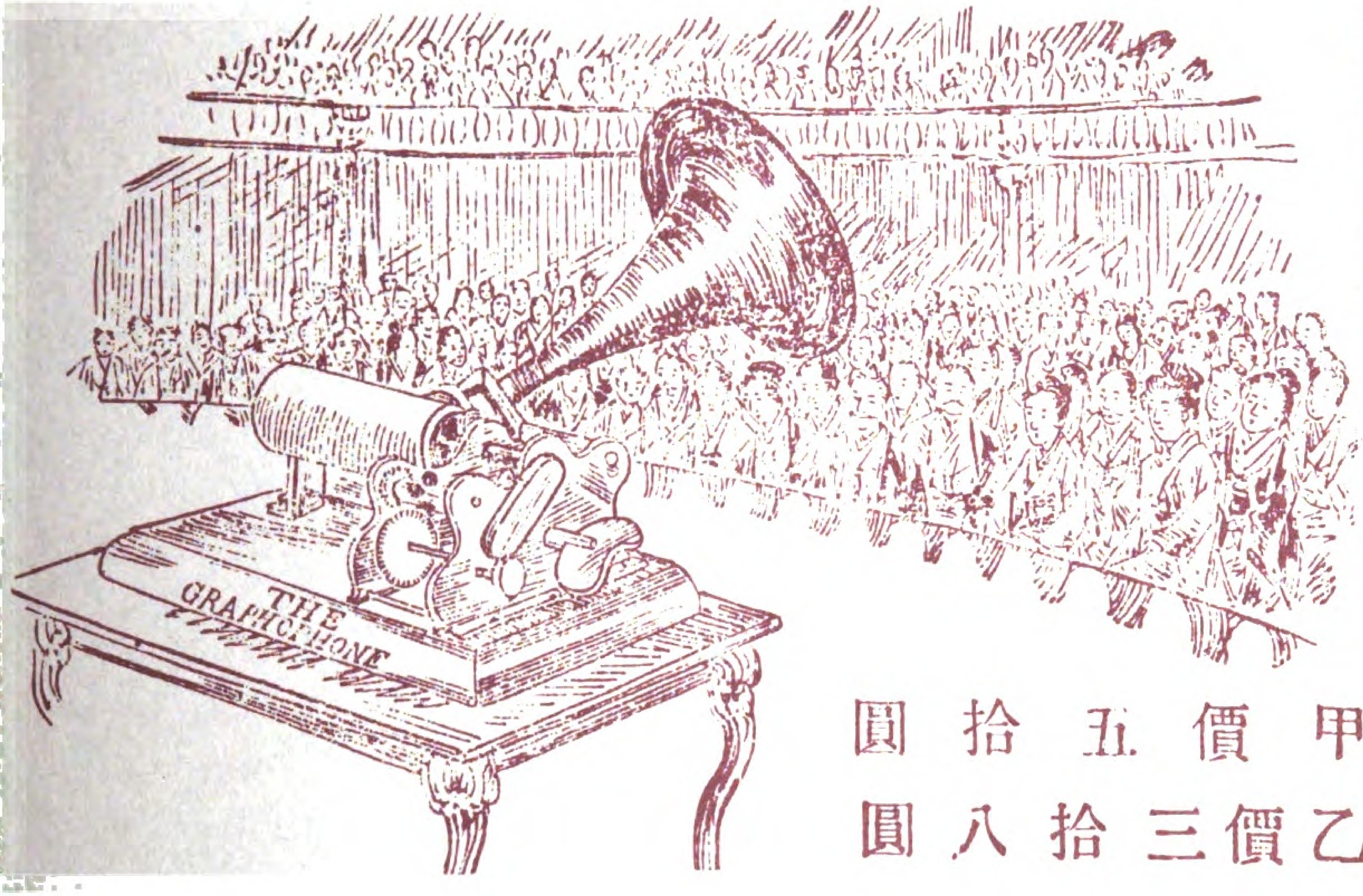
編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄

發行所（電話番號本局八八）　東京京橋區築地二丁目二十一番地　國光社

“The Machine That Talks.”

最新完備 簡便蓄音器函（グラフォフォン）



甲價五拾圓

乙價三拾八圓

米國紐育蓄音器製作會社最新ノ發明

一從前ノ音蓄器（フォノグラフ）ニ比スレバ小形ニシテ携帶ニ輕便ナリ
一音響明瞭ニシテ言語歌謠ハ勿論樂器ノ音調等モ分明ニ傳ルヿヲ得
一喇叭管ニ耳ヲ附ル迄モナク相應ノ廣間ニ於テ座隅ニ至ルモ之ヲ聽テ瞭然タリ
一器械堅牢ニシテ破損ノ患ナシ電氣燈ノ設アル所若クハ電池ヲ備ヘタル所ニテハ電氣ヲ以テ運轉セシムルヿヲ得
一價格ハ從前ノ蓄音器（フォノグラフ）ニ比較スレバ頗ル廉ナリ

右之特色アルヲ以テ紳士令夫人ノ座右ニ欠ク可カラザル學術的ノ清玩ニシテ優美ノ樂具ナリ速ニ御購求アリテ其妙ヲ試ミ玉ヘ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地

時計及寶玉類 貴金屬美術品 商（電話番號本局三百三十三）

天賞堂



妙技一等賞牌

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）

天賞堂小川町出張所

大坂市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七百三十三）

天賞堂大坂出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番地

天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地

天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町上通鍛冶屋町十番地

天賞堂熊本出張所

長崎市萬歳町上野屋方

天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色内町越中屋方

天賞堂小樽臨時出張所

〔明治二十四年八月四日内務省許可 明治二十五年三月十二日遞信省認可〕

〔印刷所 東京國光社印刷所〕